

Ⅲ. フォーラム

1. 実行委員会会長挨拶

丹波地域大学連携フォーラム実行委員会 会長 出町 慎

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました、関西大学の出町と申します。今年度からこの実行委員会の会長を務めさせていただいております。今日僕は丹波市青垣町から来ていますが、朝は雪が積もっておりました。皆さんもそうかもしれませんが、非常に僕はまだ手が冷たくて非常に寒い中、ある意味丹波らしい空の下、丹波らしい気候の中、こういうフォーラムをできるというのはとても良いことかなと思っています。今日はそんな天候の中、お集まりいただき、ご参加いただきました皆さん、ありがとうございます。学生の皆さんも、はるばる丹波地域まで篠山の方まで来ていただきまして、ありがとうございます。

先ほど関西大学佐治スタジオ所属ということで事務局から紹介してもらいましたが、実はこのフォーラムが始まった当初は、僕は学生の皆さんと同じ側にいました。そして、佐治の方で活動している内容を紹介している立場でした。まさかいつの間にかこのような立場になって、ここで皆さんに対して挨拶を述べているなど想像も付きませんでした。時間が経っていろいろなことがあり、いろいろな縁があってこういう役を務めさせていただいております。ですから皆さんも、もしかするとこの中から何年後かは僕と同じような立場で挨拶している人が出てくるのではないかと、むしろそういう期待をしています。

今日のフォーラムは、テーマが『学生の地域貢献活動の魅力』ということで神戸大学の衛藤先生にお世話になりました。企画を考えてきました。当然衛藤先生も皆さんと同じ立場で、何年か前は活動の発表をされていまして、このあと講演でお世話になります橋田さんも、何年か前は学生の皆さんと同じ立場で活動の紹介をしていました。そういう意味で、非常にいろいろな縁を感じるフォーラムになっています。

今日は僕から簡単ですが、2つのテーマを皆さんにお伝えしたいと思います。僕は丹波地域で10年ほど活動していますが、その中でいつも大事にしているテーマが『共働』と『継続』の2つです。『共働』というのは「共に働く」と書きますが、共働するというのはこういう活動をしていく上ですごく重要なことです。皆さんも当然もう感じていらっしゃると思いますが、一人で地域に入って何か活動していくことはほとんど不可能に近いですね。いろいろな方と力を合わせながらやらないと何も実現できないということが、こういう活動の魅力だと思います。ですからいつも学生同士、地域の方々、行政の方とか、専門家の先生方とどのように共働していくのかというのは、すごく重要なテーマだと思っています。

共働の中にはそういう直接的な共働ともう一つ重要なのは、間接的な共働というのがあると思います。皆さんが各大学で活動されるのは、直接的な共働だと思います。間接というのは、実際には一緒に活動するわけではないですが、同じような活動をしている仲間がいることを感じられるということも重要な共働の形だと思います。こういうフォーラムはまさにそういう間接的な共働の場になっていくのではないかと、と思っています。いろいろな大学同士の繋がりを持って、同じ丹波地域でこういう思いを持っているいろいろな困難に立ち向かって頑張っている仲間がいるんだという思いを、この場をもって共有できれば、すごく意味のある場になるかと思っています。

『継続』ということがもう一つのテーマですが、継続は多分皆さんどの活動をしている中でもすごく難しいし、いろいろな壁にぶち当たっていくテーマだと思います。僕も10年間活動していますが、いまだにどのように継続をしていくのが良いのか、継続の形というものは答えがないのが本音のところだと思います。むしろ答えがないので、常にいろいろなトライアンドエラーをしながら、継続していくためにどうしたら良いのかと取り組んでいく。もしくは先ほど言ったように、同じ思いを持って同じ課題に悩んでいる仲間達と「いろいろなことを共有しながら活動を継続していく

にはどうしたらいいか」を考えていくのが良いかと思います。

僕は先ほど2つテーマを出しましたが、もっといろいろな課題を持って活動をされていると思います。今日こういう場で皆さんが、そういうことをいろいろな仲間と協力し合って、是非次のこれから先の活動に繋げていく、そんな場にしていただければと思います。

今日は一日、夕方まで長くなりますが、有意義な時間を過ごせたらと思っています。どうぞ、よろしく願いいたします。

2. 主催者挨拶

丹波県民局長 福本 豊

皆さん、こんにちは。丹波県民局長の福本でございます。本日はこの丹波地域大学連携フォーラムに本当に忙しい中、このようにたくさんの方にご参加いただきまして、本当にありがとうございます。

このフォーラムは、今回で8回目を迎えます。この機会に大学生に行っていただいている地域貢献活動について、大学生側からと地域住民の方側からと両方からの視点で考える機会にしたいということで、本日は地域住民の方にも参加をいただいています。地域住民の皆様には、本当に日頃から学生の活動に対して温かく、ご支援・ご協力をいただきまして、本当にありがとうございます。

少し紹介させていただきますが、この丹波地域には県民局の支援事業を活用してこれまでに、篠山市で8地区、丹波市で8地区の計16地区において9大学、今回の団体も含めて延べ36の学生団体が活躍してられています。こんなにたくさんの方が地域に入って活動しているというのは、県下でもこの丹波地域しかありません。丹波地域には大学がありません。皆さんが大学生のパワーで丹波地域を本当に元気づけてくださっていることに感謝しています。活動していただくことも大事ですが、どんどん丹波地域のことも知っていただいて、好きになっていただいて、周りの人に勧めていただいて、丹波に来る人がどんどん増えるようにPRしていただけたらと思います。

井戸知事も学生がこの地域で頑張っていることを本当にいつも褒めています。県民局としても、管内の両市、篠山市、丹波市としても、これからも皆さんの活動を応援して参りますし、活躍ぶりをどんどん情報発信して活動の輪をもっともって広げていきたいと思っています。

少し時間を取りますが、今日一つだけ私からお伝えしたいことがあります。この言葉を覚えて欲しいのです。『丹波の森』という言葉です。そこをしっかりとPRさせていただきたいと思っています。この丹波地域では、人と文化と自然が一体で調和しているということで、この地域を『丹波の森』とって、その『丹波の森』を守り育てていくという取り組みを長年続けています。これは昭和63年、約30年前に住民の総意として採択された『丹波の森宣言』という宣言から始まっている取り組みです。以来30年に渡っていろいろと取り組んでいます。少し紹介させていただきますが、4つの宣言があり、1つは、自然破壊を行うような開発は認めない、森を大切に守り育てていくという取り組みです。2つ目は、ここには丹波の森公園とかささやまの森公園とか大きな自然を体感できる公園があります。そういうものを造ったり、『たんばオープンガーデン』という活動もさせていただいております。花と緑のまち、地域づくりを進めていくという取り組み。3つ目は、城下町や古民家を保全する、国際音楽祭シューベルティアードたんばを開催する、今日の配布資料にも入っていますが、化石恐竜を生かしたまちづくりを進めるというように、個性豊かな地域文化を育てていく取り組み。最後にもう一つが、『丹波の森大学』という一般の方が参加できる大学がありまして、そこでふるさとのことを知っていただいて、ふるさとを愛する人を育てて、その方が地域に戻って地域の絆を深めて、安心した地域づくりをする。ここの学生にも関係していますが、農産物のブランド力や販売力を高めて地域を元気にしていくということで、安らぎと活力に満ちた地域づくりをしていくと。そのような4つの宣言に基づいて、4つの取り組みを30年間しています。この取り組みを実践するのは第一には地域住民の方、そして行政、そしてこの地域を応援して下さる方々です。今回集まらせていただいている大学生の皆さんの活動は、この丹波の森づくりの一つの取り組みとして位置づけられます。ですから、『丹波の森』という言葉もこれから知って欲しいです。また、皆さんが行っている活動が丹波の森づくりでどう役立っているのか、理解を深めていただいたら、今の活動の目指すべき方向もより明確になると思いますし、より一層のやりがいができるのではないかと思います。

その丹波の森づくりが来年30周年を迎えます。一世代30年を過ぎますので次の世代にしっかりと伝えていかなくてはならないということで、シンポジウムや記念事業を展開していきます。ですから、来年は是非ともそのシンポジウムに

ここに参加していただいているメンバーに参加していただき、丹波の森づくりのことも理解していただきたいですし、その場で若者からのメッセージも発信していただきたいと思って、大いに期待しております。どうぞよろしく願いいたします。

最後になりましたが、ここにお集まりの大学生の皆さんが今後ますますの活躍をされて、丹波地域が一層元気になっていきますように、また地域の皆様におかれましては、引き続き大学生の活動を温かく支援していただき、ご協力いただきますようお願いいたしまして、私からのご挨拶とさせていただきます。本日は、ご参加いただき、誠にありがとうございます。

3. 講演『学生時の地域活動を通じて得たこと』

神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ プログラムマネージャー 橋田 薫

橋田です。よろしくお願いします。神戸大学出身で、今は神戸大学・篠山市農村イノベーションラボのマネージャーをさせていただいております。先ほど出町会長からもご紹介いただきましたが、私は年齢が24歳で学生の皆さんとはほぼ変わらないと思います。どうぞ、お手柔らかに。お時間を頂戴しますが、よろしくお願いします。お付き合いください。

『学生時の地域活動を通じて得たこと』ということでお話しさせていただきます。私は神戸大学の発達科学部を出て、福住地区で学生団体の代表などをして地域づくりに参加をさせていただいていました。神戸大学と篠山市の連携事業の一環であった神戸大学側のアルバイトもしていて、ずっとそういうところにいる今に至るという感じです。『学生時の地域活動を通じて得たこと』というか、私が学生時の地域活動を通じて結果、こうなりましたみたいなことをお話しさせていただこうと思っています。

1つは『仲間』、2つ目に『しごと』、3つ目に『新しい生活』。簡潔に考えると、こうかなと思っています。

まずは、『仲間』です。福住での活動もそうなのですが、それだけではなく、神戸大学の他の地域で活動している仲間達や福住に行っていた他の大学、京都大学さんや立命館大学さんなどいろいろな学生の方と交流があって、実行委員として今日来ていらっしゃる関西大学の植地さんなどもずっと交流してお世話になっていました。篠山に来るようになってからは、同世代の大学生の方だけではなく、地域のおじちゃんやおばちゃんなどと一緒に何かするということが増えて、それが私にとってはすごく楽しかったです。

私は、神戸大学の発達科学部という教育系の学部を出ています。福住地区でまちづくり計画という計画を作る機会があったのですが、そこではまちの皆さんの「今後、未来をこうしたいよね」という意見を聞いてまとめる、という事務局みたいなことをゼミでやっていました。それに少し関わったことがきっかけで、まちの未来を作るのをお手伝いする仕事というのがすごくおもしろいと思って、卒業後、都市計画のコンサルタント会社に就職しました。2年間いろいろな行政の計画策定など企業の運営支援を仕事でしていましたが、会社の仕事の中で篠山市の仕事を取りにいきました。『まち・ひと・しごと総合戦略』という地方創生の計画を作るお仕事でした。それに関わったことがきっかけで、神戸大学・篠山市農村イノベーションラボの設立にも関わって、今は会社を辞めて篠山市に引っ越してきて、ここのマネージャーをさせてもらっています。仕事の話をする中で、いろいろその時に考えていたことなどをご紹介できたらと思います。

イノベーションラボが昨年（2016年）の10月にJR篠山口駅内にオープンしました。外から見ても全然分かりませんが、内装工事をして結構良い木の空間になっています。神戸大学と篠山市はもともとフィールドステーションというもう一つの拠点があり、このイノベーションラボというのは2つ目の拠点になるのですが、以前は私のような学生を地域に送り込むお手伝いをしている事務所でした。今は都市部の方、Uターンしたい方も繋ぐ役割をしようということで、連携事業をしています。ミッションは『農村地域におけるまち・ひと・しごとの循環を生み出す』ということで、主に3つのことに取り組んでいます。1つは研究、2つ目が教育・人材育成、3つ目が活動支援なのですが、学生さんや駅を利用される都市部の方などと地域を繋ぐという役割を担っていきたいと思っています。農村イノベーションと銘打っているだけに、地域資源の活用や農業、継業、仕事を継ぐということや古民家の活用などいろいろなテーマで市民の方もご参加いただけるようなセミナーを開催しています。また、『赤じゃがプロジェクト』という篠山市の真南条営農組合と学生の方と一緒に『赤じゃがプロダクトをプロデュースするプロジェクト』をやっています。実は、後ほど休憩時間に試食を提供させていただく予定です。あとは、『無人駅イノベーションプロジェクト』といってJRさんと協力して「市内の無人駅を活用して何かできないか」、「地域が賑わうようなことができないか」というプロジェクトもしています。それから、『ササヤマエキマルシェ』。地元の高校生の方と一緒に地域就農者のお野菜を売ったり、地域の商品企画中のものをPRしたりしていますが、先日お茶フェアというものも開催し、丹波篠山茶生産組合さんと共催でお茶のPRをしたり、新たなお

茶の可能性を一緒に考えたりしました。それから、森について学ぶ学舎をやったり、月に一回『エキラボマガジン』も発行しています。皆さんのお手元には白黒の『エキラボマガジン』の12月号が配布されていると思いますが、実は赤色です。毎月紙の色を変えて発行しています。こういうイベントだけではなく、起業を支援するスクール、農村でのビジネスを作っていくというスクールを主に運営しています。篠山市も丹波市も同じような課題を抱えていると思いますが、このままいくと人口がどんどん減って行って、地域づくりの担い手がいなくなるということで、仕事づくりや交流人口を増やすこと、Uターン者を増やすことで少しでも解決しようということで、取り組んでいるのがイノベーションラボです。駅が賑わうということだけでなく、地域の中で起業家が活躍してもらおうということに注力していきたいと思っています。篠山市はそれ以外でもいろいろな政策をされていますが、大学がシンクタンクのような役割を担っているいろいろな専門的な知見から政策提言などもしています。

大阪や神戸からも近い篠山市ですので、いろいろな人が来て増えて、いろいろな輪ができかけています。神戸大学の人は知っているかもしれませんが、もともと神戸大学と篠山市は、昔、兵庫農科大学が篠山市にあって、それが神戸に移管したのが神戸大学農学部だということでご縁があって、地域の方も割と親しみを持ってきていたということもあり、今、連携事業に至っています。最初は大学生向けの『食農コープ教育プログラム』という篠山市内をフィールドにした授業から始まったのですが、それがどんどん発展していき、地域おこし協力隊の支援を大学として行ったり、イノベーションラボで起業支援を行ったりというところに発展していきました。

このスライドのデータは少し古いですが、篠山にはかなりの数の大学生が通っています。この人数の中に私も多分含まれています。メンバーが100人いらっしゃるサークルもあって、今日も来ていると思いますが、本当にすごいなと思います。毎週篠山に神戸から通っている方々がたくさんいます。神戸大学では、大学1年生の時に篠山市内の農家さんにお世話になって黒豆の栽培を教えてもらう授業があります。学年が上がれば今度は栽培だけではなく、「地域の課題はなんだろうか」とプロジェクトチームを組んで考えていくという授業があります。その後もっと深掘りしたい人は学生団体として活動を始めたり、地域おこし協力隊になったりというような階段を作っています。結構この階段を上るといって、大学連携のご縁で篠山市に来ている人というのは私以外にもたくさんいます。この神戸大学と篠山市の連携は、市内のいろいろな地域に毎年度地域を変えてお世話になっています。ですから、それぞれの地域でその地域のことを好きになっていく学生が増えていくという感じになっています。サークル活動もたくさん発生しています。今はもっと数が増えていて、メンバーが卒業して消えているサークルもありますが、いろいろなサークルが活動しています。

私は福住で『ユース六篠』というサークルとして、最初は農業ボランティアをさせてもらうところから始めました。地域のイベントで『雪花火』という冬に花火をするイベントがあるのですが、それを地域の若手の方々と一緒に企画して運営したり、お手伝いしたりしました。地域で今も受け継がれている神社のお祭りがあり、そのお祭りの造り物、地区ごとに素敵な造り物を山車に乗せてやるのですが、それを調べて一冊の本にしたり、田んぼアートをやってみたり、都市部の人も呼んでやってみたり、田んぼアートで植えたもち米でお餅を作って売ったり、計画作りなども関わっていました。

この次のスライドは実は私が卒業してすぐに話をした時に作ったスライドで、だいぶ前のものです。私は大学の授業の『実践農学入門』などで出会いがあってお祭りに参加したり、農村ボランティアをすることで関係が深まっていったということで、そこを『接近期』と書いています。そのあとに『手探り期』があります。「大学生として何かまちづくりのアイデアを考えてよ」と地域の方に言われて、その時私はテーマを持っていなかったのも、すごく悩みながらやり始めました。ですから『手探り期』と書いています。そのうちに「まちづくり協議会のメンバーになって何かいろいろやってくれないか」と地域の方から言っていただき、まちづくり協議会のメンバーに名前だけ入れていただいたり、そのあと計画づくりがあったので、それもお手伝いしたりということで手探りを経て、だんだんサポートの形が見えてきました。最初はまちづくり協議会の方と一緒にやるのが多かったのですが、それ以外の住民の方もできることがあって、そういう独自のプロジェクトを始めてやっていたりしました。その間、サークルの部員数はどんどん減っていきました。というのも、お祭りがあるときだけ来るという人がやはり多かったのも、ほとんど私とその前の代表だけという感じでやっていました。

それでも私は楽しかったので、続けていました。

これも昔に作ったスライドなのですが、私も大学を卒業することになり、ここからは自分の仕事の時間などもあるので、「愛と責任の世界だな」と書いていますが、「愛があれば続けられるのかもしれないけど、それには責任も伴ってくるな」と感じていた時期です。一方で、福住のまちづくり協議会の若手の方などは、『雪花火』をするのに「もっと地域の若者に声を掛けてやろう」と言い始めていた時期でもあって、自分の地域のやりたいことに沿ってもっと若手に声を掛けようと言ってもらったのが私は良かったなと思っています。今でも『雪花火』は、「大変、大変」と言いながら続けていらっしやいます。

「学生と地域の関わりについて考えてください」と以前言われた時に思っていたことがあります。学生にとってはその活動に参加することが「自分はここの地域や地域の課題などにどうやって関わろうか」と考えるきっかけであって、一方で地域にとっては「どういうふうな未来を作っていくのか」、「地域はどうありたいのか」と考える中で学生さんとお付き合いすることになると思うんですね。その間にOBとか大学の研究員でも良いのですが、繋いでくれる人、対話するメンターみたいな人がいてくれると、すごく助かるなとその時は自分も思っていました。今イノベーションラボのコーディネータをしています、そんなに頼りがいのある存在になれているかどうか分かりません。でも、スクール生の支援とかそういう立場で繋ぎ役として私がいるなと気付いて、学生の時に思っていたその役割を今自分がやっているのかもしれないと思いました。

篠山イノベーターズスクールは、『農村で新しい価値を生み出し仕事をつくる人のための駅直結、通学型ローカルビジネススクール』と銘打っています。今、3期目に入っていて、OBを含め約60人が学んでいます。開始から1年経ったところですが、実際に地域で新規就農されたり、Uターンで農業を継いで始めていらっしやったり、起業の事例は結構出てきています。このスクールは、『農村』（篠山）に関わる人を増やすためには、地域の資源を生かした『しごと』が必要だと。そのための資源はある。足りないのはそれらを正しく使える『人』だ。それと『仲間』だ。ということで、人と人、資源を掛け合わせる熱い学びのコミュニティ『場』を作ろうということできました。今農村での起業・継業に向けてノウハウなどを支援しているという感じです。もう講演時間が残り少ないので、ザーっといきますが、地域ビジネスに弟子入りするCBL（Community Based Learning）というプロジェクトなどいろいろなプロジェクトをやっています。こういうプログラムと大学の先生などから農村や地域の課題解決についてどうしたら良いかということや、ビジネスをどう考えたら良いかを学べるセミナー、起業のサポートという3つで成り立っています。スライドに映っているのが、1期生、2期生、3期生の方々です。本当に「農村で何か仕事を作りたい」、「ここで暮らしていきたい」、「Uターンで地元を何とかしたい」と言ってUターンで戻って来られて、学んでいる方々を私も目の当たりにしていますが、すごく刺激を受けます。これはイノベーションラボの中で作戦会議をしているスクール生の様子です。ということで、『しごと』の紹介でした。

私が得たことの3つ目、『新しい生活』です。これはすごく個人的な話なのですが、『ユース六篠』の前の代表をしていた人が同じ福住という地域で新規就農をされました。それを私は個人的にお手伝いをしています。そういう『新しい生活』を得たと。その農場でイベントをしたり、今地域おこし協力隊で活動されている方とも協力してやらせてもらったりしました。それから、その他にも地域で今おばちゃん達と作戦会議をしているのですが、「新しいチャレンジができないかな」と準備中です。わくわくしています。

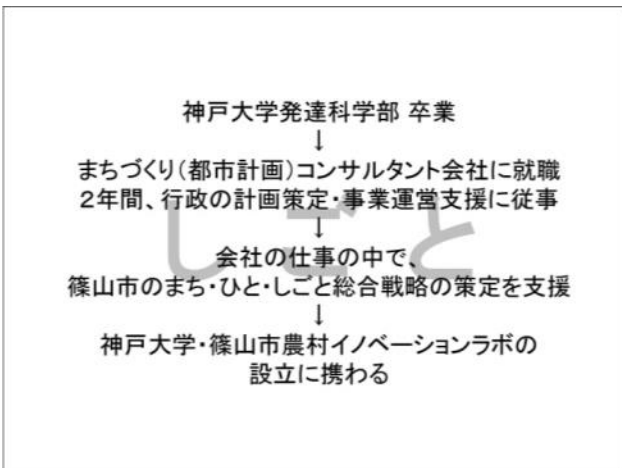
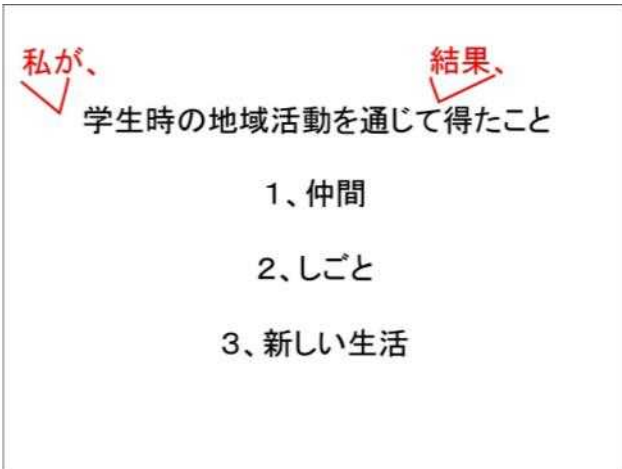
ということで私は学生活動を通じて、『仲間』と『しごと』と『新しい生活』を得たという結論になります。

皆さんの活動の中で、いろいろな立場の方がいらっしやると思いますので、いろいろ思うことはあると思いますが、私と地域との出会いは大学連携だったということです。でも、私以外にもたくさんのOBが地域で活躍しているということが一つの事実としてあります。移住・定住の施策をどこの市町村もされていると思いますが、地域に興味を持っている大学生であったり、そういう方も貴重な一資源なのではないかと私は自分事かもしれませんが思っています。いろいろな方と関わる機会が増えると地域の方も大変なこともあると思います。でも、行政の方や地域の方は、自分達の地域として、

あるいは人として、そういう学生の方とか若い人と「どういう付き合いをしていこうかな」ということを、当然なことを言ってすみませんが、考えていかれたらよいのではないかと思います。

これは、最後に宣伝ですが、篠山イノベーターズスクールの4期を来年の5月19日にキックオフ予定です。2月から応募を開始しますので、1月下旬頃に詳細を公開します。ローカルで自分の仕事をつくりたい仲間を求めていますので、そういう未来に興味があるという人は是非ジョインしてください。

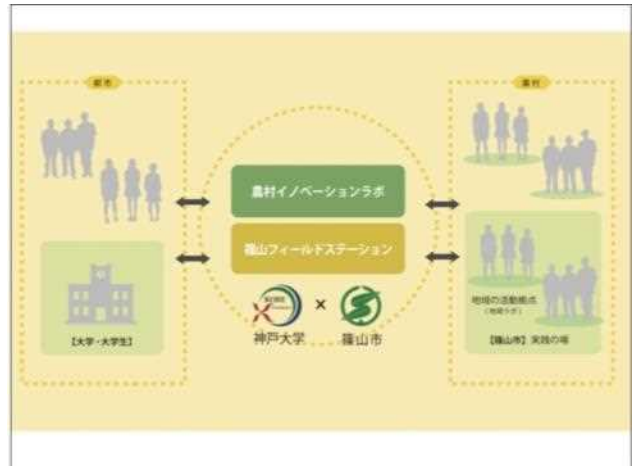
ありがとうございます。以上です。



Rural Innovation Lab
KOHJI UNIO
YASUYUKI
YASUYUKI

農村の
未来をつくる
新ナカ実研室。

神戸大学・篠山市
農村イノベーションラボ
2016年10月3日(月)
JR篠山口駅にオープン。



ミッション

農村地域における
まち・ひと・しごとの
創造的な循環を生み出す

ラボの3つの取り組み

- 1) 地域創造研究** 農村地域の課題を解決し、新しい価値を生み出すような研究をおこないます。大学と地域の人や資源のマッチング、共同研究のコーディネート、基礎的な調査研究から、アクションリサーチといわれる実践的な研究まで幅広くおこないます。
- 2) 地域人材育成** 篠山や農山村地域を舞台に活躍する実践者たち、地域の発展に貢献しているリーダーたちの学びや挑戦、成長をサポートします。「食農コープ教育(大学生向け)」や「篠山イノベーターズスクール」など、地域に根ざした実践的な学習プログラムを企画支援します。
- 3) 情報・活動支援** さまざまな立場の人々のネットワークづくりを支援し、地域情報の共有と創造を進めます。各種ワークショップやセミナーなどをおこなうとともに、地域づくり活動、政策についてのアドバイスやサポートもおこないます。



地域の課題と・学の「知」の活

弱みを強みに（逆転の発想）

弱み

- 空き家の増加
- 耕作放棄地の増加
- 文化財の活用が不十分
- ブランド化の立ち遅れ
- 高齢化や担い手不足
- 厳しい財政状況

強み

- 歴史的なまちなみ
- 美しい田園風景
- 多様で豊富な文化財
- 豊富な農産物
- 力強いコミュニティ

市施策

- まちづくり協議会設立支援
- 景観行政団体への移行（市域全域対象）
- 丹波篠山の家プロジェクト
- 歴史文化基本構想
- 環境基本計画
- 「創造農村」（日本遺産&ユネスコ）
- 地方創生戦略

シンクタンク機能
調査分析→施策提案

神戸大学
（農学部）
（旧兵庫農科大学）

連携

兵庫・近畿の諸大学



創造農村 篠山

ユネスコ世界遺産「丹波篠山」
ユネスコ世界文化遺産「丹波篠山」

丹波篠山 歌い継がれるふるさと
デカンショ節
「日本遺産」に
文化庁18件初認定

観光振興 地域活性化へ

（平成27年4月 神戸新聞）



神戸大学×篠山市の連携の歩み

- 1949 兵庫県立農科大学 篠山市に開学
- 1966 神戸大学農学部（神戸市内）に移管
- 2006 神戸大学篠山フィールドステーション開設
- 2007 篠山市×神戸大学大学院農学研究科 地域連携協定締結



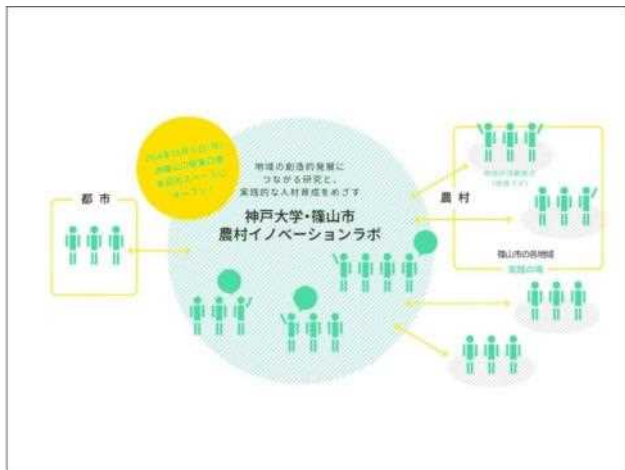
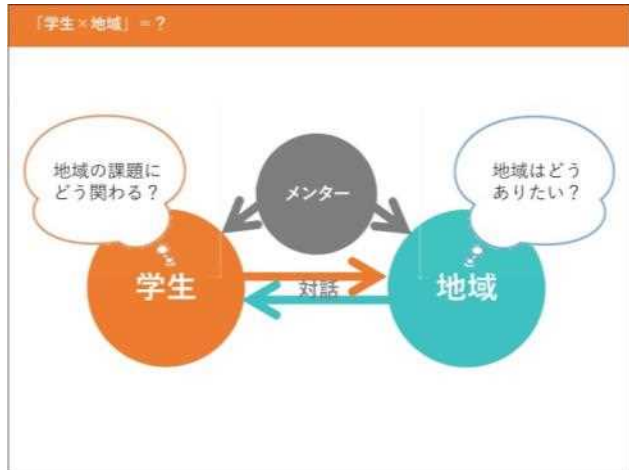
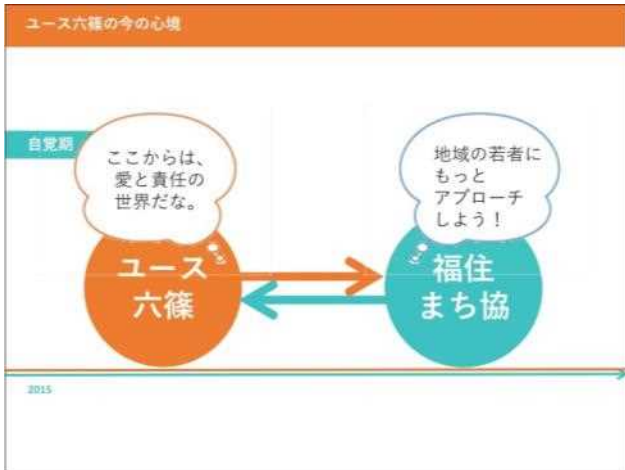
篠・フィールドステーションの開設(2006)

- 旧社会福祉協議会事務室建物を活用（無償）（2006.11）
- 地域連携協定締結/連携計画書/駐在研究員（2007）



篠山市全体を“生きた”現場として教育・研究を行う大学と連携して地域課題の解決や地域活性化を図る。





Sasayama Innovators School

篠山イノベーターズスクールとは？

Sasayama Innovators School

農村で新しい価値を生み出し
仕事をつくる人のための
駅直結、通学型
ローカルビジネススクール。

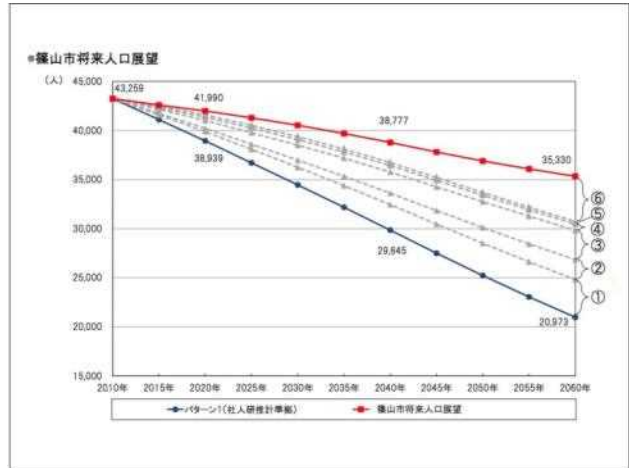
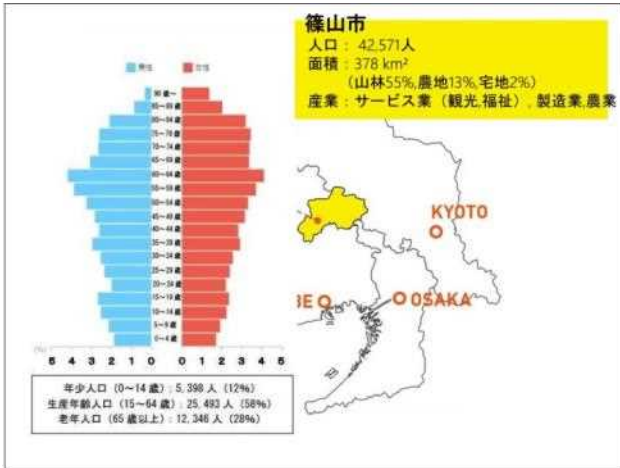
ローカルで、自分のしごとをつくる。

いま、農村地域は、仕事や経済、農業、自然環境、健康や福祉、歴史、文化など、さまざまな面で課題を抱え、若者が暮らしようにも、安定した仕事や暮らしに結びついていません。そうした中で求められるのが、新しい仕組みを創出する力、イノベーションです。

篠山イノベーターズスクールは、農村で新しい価値を見つけ、仲間や地域とネットワークをつくり、地域の課題を解決し、自分のしごとを生み出すための、1年間のプログラムです。

篠山を舞台に、地域ビジネス実践家に指導して取り組む実践的プロジェクト、農村での実践に必要な理論や知識を学ぶセミナー、そして、個々の課題に応じた起業・就業へのサポートを、地域や行政、専門家とともに、全力で提供します。





「農村」(篠山)に関わる人を増やすためには…

▼

地域の資源を生かした「しごと」が必要。

▼

そのための資源はある。

空き家、農地、山林、伝統・文化、自然、…

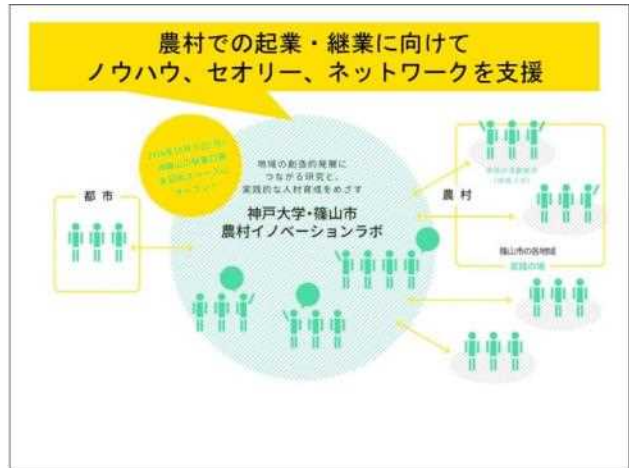
▼

足りないのは、それらを正しく使える「人」、
それと「仲間」。

▼

人×資源、人×人掛け合わせる

熱い「場」(学びのコミュニティ)を作ろう



篠山イノベーターズスクールの特徴

- 駅直結、京阪神から約1時間
- 平日夜と土日に開講 サラリーマンも、起業準備◎
- ノウハウ得ながら実践(CBL) + 理論・視点 + 伴走支援

ノウハウ

地域ビジネス実践者10名以上が講師となり、地域資源を生かした、新しいビジネスモデルを学ぶノウハウを伝授します。

セオリー

地域での起業・継業や地域ビジネスの成功・失敗事例、大学の最新研究・成果、起業家・経営者・研究者との交流機会が豊富です。

ネットワーク

実践者や起業家、地域ビジネスの成功・失敗事例、大学の最新研究・成果、起業家・経営者・研究者との交流機会が豊富です。

地域イノベーターとして、起業・継業に取り組み

篠山イノベーターズスクールの構成

プロジェクト、最大 **8** 名。

地域ビジネス実践者に師事し、ノウハウやスキルを学ぶ

農村地域での活動に必要な基礎知識を学ぶ

実践者や専門家とともに起業・継業を進める

Community Based Learning

【全8回(土・日)×3セッション】

篠山を舞台とするプロジェクトに参加し、地域ビジネス実践者からノウハウやスキルを学びながら、自分たちがビジネスを構築していきます。

セミナー

【全8回(土・日)×3セッション】

大学の教員や実践者から、地域でビジネスを活動を行う上で必要な理論や考え方を学びます。最新のノウハウ、実践を盛り込んだ授業です。

起業・継業サポート

【1年間】

地域や先輩実践者とのネットワークを活用し、ビジネス開始に向けた具体的な活動を支援します。また、このサポートに向けて、様々な実践者や専門家とつながり、継続サポートを行います。

地域ビジネス実践者に師事しノウハウやスキルを学ぶ

Community Based Learning

Community Based Learning 3期

フタバ型 農業で就農プロジェクト

大塚 隆之

Community Based Learning 3期

ローカルメディアをなわいにするプロジェクト

原田 一博

Community Based Learning 2期

これからの里山林業創造プロジェクト

比呂 孝一

Community Based Learning 2期

地域に根ざしたツアー企画物業プロジェクト

高橋 文子

Community Based Learning 2期

草木を活かす手仕事づくりプロジェクト

石野 美津子

Community Based Learning 1期

「丹波食べる通信(味噌)」立ち上げプロジェクト

高橋 文子

Community Based Learning 1期

クリエイティブ農業実践プロジェクト

比呂 孝一 / 高橋 文子

Community Based Learning 1期

跡地活用スモールビジネス立ち上げプロジェクト

高橋 文子

Community Based Learning

ローカルメディアを なわいにする プロジェクト

原田 一博

原定会場
メンバー募集 **2017.8/10→9/10**

【全8回(土・日)×3セッション】

地域でビジネスを活動するための実践者から、最新のノウハウやスキルを学びながら、自分たちがビジネスを構築していきます。

【1年間】

地域や先輩実践者とのネットワークを活用し、ビジネス開始に向けた具体的な活動を支援します。また、このサポートに向けて、様々な実践者や専門家とつながり、継続サポートを行います。

【全8回(土・日)×3セッション】

大学の教員や実践者から、地域でビジネスを活動を行う上で必要な理論や考え方を学びます。最新のノウハウ、実践を盛り込んだ授業です。

【全8回(土・日)×3セッション】

実践者や専門家とともに起業・継業を進める

Seminar 2018.7-8 (土)

食と農の流通とマーケティング

講師 神戸大学大学院経営学研究科 教授 小野 雅之

1	流通の現状と今後の展望	7/14 (土)	10:40-12:10
2	流通・消費動向の把握方法(食品・野菜と動物性タンパク質)	7/21 (土)	10:40-12:10
3	フードトレンドの把握と今後の展望	7/28 (土)	10:40-12:10
4	フードトレンドの把握と今後の展望	8/4 (土)	10:40-12:10
5	流通・消費動向の把握方法(食品・野菜と動物性タンパク質)	8/11 (土)	10:40-12:10
6	流通・消費動向の把握方法(食品・野菜と動物性タンパク質)	8/11 (土)	12:10-14:40

Seminar 2018.8-9 (水)

ローカルデザインスキル

講師 二階堂 薫

1	都市の中心と周辺部の関係	8/22 (水)	19:40-21:10
2	地元も都市の中心と周辺部の関係	8/29 (水)	19:40-21:10
3	地元の個性を活かしたデザイン	9/5 (水)	19:40-21:10
4	地元の個性を活かしたデザイン	9/12 (水)	19:40-21:10
5	地元の個性を活かしたデザイン	9/19 (水)	19:40-21:10
6	地元の個性を活かしたデザイン	9/26 (水)	19:40-21:10

実践者や専門家とともに 起業・継業を進める

起業・継業サポート

ビジネスモデルづくり Plan

こんなサポートが受けられます。

- メンター支援
- 事業計画の作り方相談
- 資金調達の基本知識
- 事業継承・再仕に関する相談
- 新分野での創業に関する相談

地域での実践 Do&See

こんなサポートが受けられます。

- 仕事場(オフィス)の紹介
- 事業先の紹介
- 住居の紹介
- 地域での暮らしに関する相談

離陸 Take Off

こんなサポートが受けられます。

- メンター支援
- 事業計画の見直し相談
- 金融機関との融資相談
- 分野に応じた創業支援補助金
- 新路線6・PRに関する相談

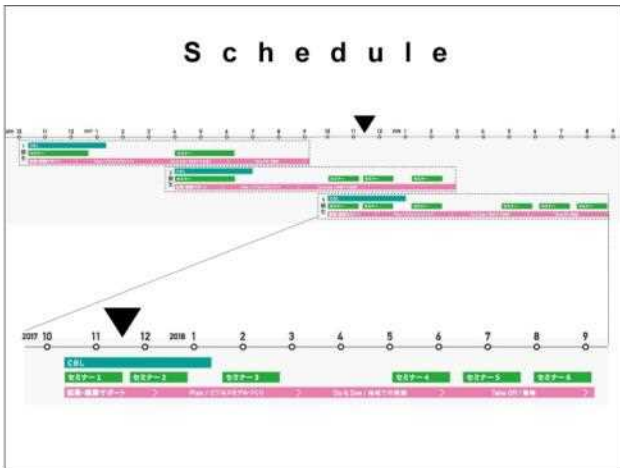
運営体制

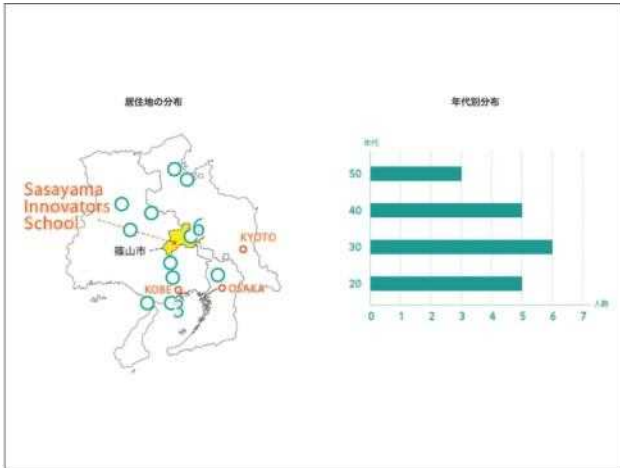
篠山イノベーターズスクールは、篠山市とご協力のもと運営されています。

Sasayama Innovators School

神戸大学・篠山市 農村イノベーションラボ

主催：篠山市 事業運営：一般社団法人EKILAB 企画協力：神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ





Community Based Learning 1期

「丹波食べる通信 (仮称)」

立ち上げプロジェクト

講師/メンター
「四国食べる通信」編集長
眞鍋 邦大



Community Based Learning 1期

クリエイティブ

農業実践

プロジェクト

講師/メンター
吉良有機農園
吉良 正博 / 吉良 佳晃



Community Based Learning 1期

跡地活用
スモールビジネス
立ち上げ
プロジェクト

講師/メンター
「ミドリカフェ」オーナー/ランドスケープデザイナー
ウチダ ケイスケ




Community Based Learning 2期

これからの
里山林業創造
プロジェクト

講師/メンター
有限会社ウッズ 代表取締役
能口 秀一






Community Based Learning 2期

地域に根ざした ツアー企画開業 プロジェクト

講師/メンター
悠ツアー 代表
森 聖太



Community Based Learning 2期

草木を活かす 手仕事づくり プロジェクト

講師/メンター
美し山の草木舎
渡部 康子





Community Based Learning 3期

ローカルメディアを なりわいにする プロジェクト

講師/メンター
株式会社 moronda 代表取締役
「秋方フーシェン」編集長
原田一博



Community Based Learning 3期

フタバ型 農業で就農 プロジェクト

講師/メンター
futaba cafe 代表/農家/講師
西田博一



Sasayama Innovators School
イノベーターズ・ピッチ 2017

Rural Innovation Lab

KOBE UNIV. SASAYAMA

神戸大学・篠山市
農村イノベーションラボ

新しい生活

メニュー ノウカナガイについて 黒枝豆 玉黒花生 固定種の野菜 お問い合わせ

兵庫の東端、篠山城から京都に続く古い宿場町で、お米や黒大豆、固定種の野菜づくりと狩猟をしています。農業・化学肥料を使わないことで、多様な生き物が生活できる田園を目指しています。

#nouka_nagai

お正月用の内産黒大豆、乾燥中です。豆の先がツルツルになる。乾燥で色づいていくな。乾燥、中々だよ。 #nouka_nagai

今日はまぐろサイエントです。 #nouka_nagai

黒豆の乾燥中。暑いもので車の庫です。 #nouka_nagai

前にも探入る有糖ジャウガがとれま。 #nouka_nagai

味が濃厚でいく。黒豆も、ししとうも。 #nouka_nagai

冬の野菜の部の仕込み。日本の国産。 #nouka_nagai

風景を作っていく野良着「SAGYO」の展示販売会×丹波黒大豆枝豆の収穫体験・直売

篠山 > 美山 > 神戸
SAGYO
2017.10.14 - 11.5

地域での新しいチャレンジ準備中

ローカルで、自分のしごとをつくる仲間、求む！

ローカルで、自分の仕事をつくる。

Sasayama Innovators School

4期開講、決定！！
5月19日、キックオフ。

応募期間：2月1日～4月8日（予定）
1月下旬、ホームページに詳細公開予定！

4. 司会者挨拶

神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ 学術研究員 衛藤 彬史

よろしくお願いたします。ただいまご紹介をいただきました神戸大学農学研究科学術研究員の衛藤と申します。先ほど講演をしていました橋田さんと一緒にJR篠山駅内に去年の10月に新しくできました農村イノベーションラボに駐在しております。

冒頭に出町先生からもご紹介をいただいたように、僕もちょうど2014年と15年、3年前ですね、まさにこのフォーラムで学生の立場で発表をさせてもらってました。2年間そういう形で発表をして、そこから2年間は今度は運営側みたいな形で関わることになって、今日もこういった形で発表、グループ討論と進行を務めさせていただくということで、お世話になりたいと思っております。

正直、当時の僕達は、活動自体は真剣にやっていたかなという気がしますが、年に一回こういうところに集まってやる時は、少し斜に構えたところがあって、「こんな丹波地域で活動している人の発表とかあんまり興味ないやん」みたいな感じでどちらかという少し義務感で来ていたところがありました。それで、発表後の討論についても「初対面の人と別に何も喋ることないやろ」みたいな、どちらかというそういう態度で臨んでいたところがあって、それをちょっと今後悔しているというか、もったいなかったなど単純に思います。

僕の大学は京都なのですが、当時は京都に行って、篠山に関わっていて、あまりこういうことをいろいろなところでやっているというのを知らなかったのも、普通のことかなかなという思いもありました。でも、意外とよその地域では同じ地域に入っている他の学生が、一堂に会して交流ができたり、どういうことをやっているか知れる機会ってあるようなというのが現状です。よその地域で「こういうことをやっているよ」とサラッと言うと「丹波篠山ってそんなことやってんねや」と言われることが結構あって、それは機会としては結構珍しい、単純に考えて年に一回直接集まれるというのは貴重だということを感じて少し離れて見たときに感じました。

それと僕は、楽しいか楽しくないかではなく、楽しもうという気持ちが大事なのではないかと今になって思います。そんな気持ちに最近はなっていて、そんな気持ちで見返した時にもったいなかったなど。ですから、今日は他のグループの発表をこれまでから交流のある団体はちょっと知っていたりもすると思いますが、全然知らないところであっても、これから活動を続けていくときに得られることが必ずあると思いますので、そういう気持ちで聞いて、そのあとのグループ討論もそういう気持ちで、楽しもうという気持ちで、この機会を上手に使ってやろうという気持ちで積極的に参加をいただければなと思っています。

特に神戸大学は結構知っている顔というか、これだけ人数がいろいろなサークルがあったりすると思いますが、他の大学から参加している団体と同じように他の地域に入って活動している学生と交流がなかなかないよという方は特にこういった機会にネットワークを作っていただいて、今後の連携の可能性などを探っていただければ、そういう機会になればと思っています。

5. 学生からの地域貢献活動報告

(1) Bamboo Bus Stop Project

京都大学の Bamboo Bus Stop Project の竹のバス停プロジェクトです。私達は、篠山市福住地区で放置竹林から間伐した竹を使ってバス停を作るプロジェクトを進めています。

こちらのイラストは現在進めている竹のバス停のイメージデザインです。私達の活動は、去年の12月に東雲高校と一緒にいったワークショップで、高校生の方から出た「竹のバス停を作れば観光客が増えると思う」という一言から始まりました。竹を伐採して、その竹を用いて建設するだけではなく、建設後のメンテナンスや、そのバス停の地域の待合所として地域に定着してもらうこと、さらにはそうした中で、循環して行ってまた竹林の整備を次年度にやっていくというところを考えた継続的プロジェクトを目指しています。今は東雲高校と福住のまちづくり協議会、地域おこし協力隊の方と、京都大学の私達のグループで協力しながらプロジェクトを進めているところです。

4月から12月までの活動について簡単に紹介します。私達のこのプロジェクトは東雲高校の授業の一環として取り組まれており、生徒さん達とは福住のまちを歩いて、どのバス停を改修したいか意見を出し合ったり、作りたいベンチの模型の製作、竹の伐採、ベンチの製作を一緒に行ってきました。地域の人達とは、ボランティアガイドさんに福住を案内していただいたり、ヘリテージマネージャーの建築家さんに、伝統的建造物群保存地区である福住にはどのようなデザインが適しているかというアドバイスをいただく等、調査や打ち合わせを一緒に行ってきました。また、竹のテントの試作や、福住に『森の風土』という古民家を改修した宿があるのですが、そちらの囲炉裏を使って竹を加工するなど一緒にそういう製作作業も進めてきています。

私達だけでやっていることはそんなにあるわけではありませんが、主にやっていることとしては、私達のグループが建築を学んできた学生で成り立っているということで、「バス停をどのようなデザインにするか」というデザインの検討をグループとして行ってきました。また、先月京都大学で行われた大学祭でこれまでの活動について発表を行いました。

こちらのスライドは8月に篠山市役所に「こういったバス停のデザインを考えています」と提案書を提出した時にいただいた意見を反映して修正させたうえで、先月の11月に福住地区のまちなみ保存会で「こういったものを地域に作ると思っています」と提案した時のものです。短い時間の中で説明をしなければならなかったために、プロジェクトの概要や、バス停でどのようなヒアリングを行ったか、またはどのようにデザインを進めてきたか、これからどうやってプロジェクトを進めていくかなどの多くの内容を分かりやすく短時間で説明する、そういうまとめ方に大変苦労しました。

こちらが実際に制作したバス停の試作です。ベンチはメンテナンスしやすいように足の部分は木造で作っていて、座面の部分は竹にしています。そうすることで座面の竹が朽ちても、すぐにメンテナンス、その貼り替えができるようにデザインを行いました。また壁は、この福住地区で用いられている伝統的な住宅のデザインを取り入れました。背もたれは、篠山地域で伝統的に用いられてきた藍染を取り入れています。

これまでの成果としては、60本以上の竹の伐採、バス停のデザインの提案、その試作の製作があげられます。我々にとって一番嬉しかったことは、スライドにあるような声です。授業をやっていくうえで、高校生がプロジェクトに対してどういう思いを抱いているのかが我々にとって気になる部分でもありました。高校生のメンバーが他の友達に「このバス停おれがやってんねんで」と自慢してくれていたときは少し感動してしまいました。彼らがこれを自分達のプロジェクトだと思ってきているということは、今後も継続的に活動をしていくうえで大きな意味をもっていると思います。また地域の方からも、「継続して他のバス停もやってほしい」などのお言葉をいただいています。このプロジェクトが地域にとっても意義のあることなのかなとやりがいを感じているところです。

これまで苦労したところは、福住が伝統的建造物群保存地区に指定されているためにデザインの制限があったことです。まちなみ保存会では、最初我々の勉強不足で、一度デザインを却下されてしまいました。でもそれがきっかけで、地域の伝統的な住宅の中を見せていただく機会にもつながり、我々も福住をより深く知ることができたと思っています。バス停

の維持・管理方法、それから関係団体との連携ですが、まだ一年目のプロジェクトということもあり、地域の人に協力していただきながら手探りで進めているところです。高校での授業もどのように進めていくべきか、どうすれば高校生にやりがいを感じてもらえるか、ということを経験しながら進めてきました。まだプロジェクトは終わっていませんが、彼らにもやりがいを感じてもらえる授業になっているのではないかと考えています。

活動のアウトプットとしては、これまでに二度丹波新聞さんに取り上げていただきました。また地域おこし協力隊の方には、福住の住民の方向けの地域の広報紙『さとネット』で活動を取り上げていただきました。こちらは、先月行われました福住地域のお祭り、『福住祭』での展示の様子です。ここで実際に座っていただいて、座り心地、改善点などご意見をいただきました。こちらは、京都大学で行われました大学祭での展示です。さまざまな分野の方々からご意見、ご感想、激励の言葉などをいただきました。

今後の活動ですが、やはり一番課題になっているのは、バス停の建設費用を確保することです。金銭面を考えると私達学生グループだけではちょっと活動には限界があるので、今後はその地域に根差したビジネス事業なども考えて継続していく必要があるかと考えています。また、福住では 2020 年に伝統的建造物群保存地区の全国大会も行われます。それまでに、観光待合所や休憩場所として私達が提案したような竹のバス停やベンチがその地域に広まっていってくれば嬉しいなと考えています。今は私達はバス停のプロジェクトでしか地域と関わっていませんが、バス停以外のプロジェクトやその地域で知り合った人達の活動にもちょっと参加してみたいなと考えているところです。

今後の活動として 12 月、1 月、2 月、3 月には、バス停の製作の追い込みに入っていきます。竹の加工やベンチの製作など、高校生だけではなく地域の人達とワークショップ形式で進めていきたいと思っています。もし興味があるとか、参加してみたいという方がいらっしゃいましたら、是非私達に一言声を掛けていただければ大変嬉しいです。また本日紹介した提案書とバス停の模型は、こちらの扉を出て右手側に展示しておりますので、是非見てご意見をいただければ嬉しいです。また、先ほど写真で紹介したバス停の試作も兵庫県庁さんの方で展示させていただいておりますので是非ご覧ください。

以上、ご清聴ありがとうございました。

〔連携先の福住地区まちづくり協議会の方からのコメント〕

福住地区でお世話になっています。まちづくり協議会の事務局長をしております佐々木でございます。ただいま報告があったとおり、バンブーハウス、そして竹の駅ということで現在、京都大学さん、あるいは東雲高校には大変お世話になっております。

特に地元のまちづくり協議会というのは、なかなか現実的にものを見てしまうので、特に厳しい意見も出させてもらいました。バス停に対しては、伝統的建造物群保存地区であったということが一つの難しさでした。普通の地区で伝統的建造物群保存地区でなければ何の問題もありませんが、まちづくり協議会ではいろいろな活動をしている中で、やっぱり将来的なことまで含めたことでもどうしても考えてしまうので、「維持管理ができるようなバス停にしてちょうだいよ」などと贅沢な要求もさせてもらいました。地元も一生懸命やっついていかないといけない問題が一方ではあり、学生も限界があると思います。まちづくり協議会として、竹が広がっていけば当然あとのメンテナンスなどはやっついていかないといけないという気持ちを私自身は持っていましたし、地域の者も持っていると思います。

本当にありがたいことに、この取り組みで現在 2020 年に向けて文化庁から福住は注目していただいています、特に住吉神社という神社に京都の観光客を誘致したいという話も舞い込んでいます。今後まちが国際地域にまでなるかは別にして、そういう観光イベントもこれから入ってくる中で、このバス停がきっかけになりました。うちの村でもまた来年度作っていただけるので期待しておりますが、まだまだもっと福住中のバス停で弱っているところもありますし、まるで駅がないようなところもありますので、こういったところも整備できたらなと思ったりもしています。

特に、このバス停以外でも竹問題が実は深刻で、今日もう一つ（神戸山手大学から）報告があります獣害対策の問題

もあります。竹の放置の問題と獣害対策、これはもう福住の二大イベントというくらい悩んでおります。これは篠山市全体の課題だとも思います。

竹は山の頂上から切っていかなないとダメなんだと誰かから聞きましたが、どうしても地元では下側のふち側しか切らないという習性があります。それも最近では滞っていますが、そういうことにもまた今後皆さんのお力をお借りして、例えば竹が上へ浸食していくのを防ぐ活動にもご協力頂き、それをまた使った竹の活用についてもいろいろ工夫を地元の者とも一緒に考えながらやっていけたら幸いです。

簡単でございますが、ちょっと長くなりましたが、よろしくお願ひします。



1. 12月までの活動内容 Bamboo Bus Stop Project
竹のバス停プロジェクト 7

バス停の試作製作・展示



2. これまでの活動を通じて Bamboo Bus Stop Project
竹のバス停プロジェクト 8

【活動の成果】

- ・竹林整備（60本以上の竹を伐採）
- ・バス停のデザイン検討、試作製作

東雲高校の生徒（高校3年生、BBSメンバー）
「どや！このバス停、おれが作ってんねんで！」
東雲高校の生徒（高校1年生）
「こんなバス停くれるなんてすごい！カッコイイ！」
地域の人
「竹のベンチが良い。背もたれも良い。自分の家にほしい」

【地域から期待されていること】

- ・次のバス停のリノベーションの依頼
- ・竹林整備の依頼

地域の人
「来年はうちの地域のバス停をつくってほしい」
「次はうちの竹林を整備してほしい」

2. これまでの活動を通じて Bamboo Bus Stop Project
竹のバス停プロジェクト 9

【苦労したこと】

- ・伝統的建造物群保存地区におけるデザインの制限
- ・バス停の維持管理・運営方法の検討

まちなみ保存会
「福住は伝建地区だから、福住のデザインを取り入れて欲しい」
「バス停の維持・管理は誰がするのか？」

- ・関係団体との連携
(篠山市役所・まちづくり協議会・東雲高校・地域おこし協力隊)
- ・東雲高校の授業の進め方の検討
(高校生にもやりがいを感じてもらうには?)

3. 活動のアウトプット Bamboo Bus Stop Project
竹のバス停プロジェクト 10



3. 活動のアウトプット Bamboo Bus Stop Project
竹のバス停プロジェクト 11

【福住祭で試作品展示】

11月19日(日)に東雲高校で行われた福住祭で展示
バス停に関するアンケートを実施

⇒ 福住の人に対して広報活動
バス停に関する地域の人の意見をもらう



3. 活動のアウトプット Bamboo Bus Stop Project
竹のバス停プロジェクト 12

【京都大学11月祭で試作品展示】

11月23日(木)～26日(日)に京都大学で行われた大学祭で展示
バス停に関するアンケートを実施

⇒ 福住の活動を広報
バス停に関して大学のいろんな分野の人の意見をもらう



4. 今後の活動について Bamboo Bus Stop Project
竹のバス停プロジェクト 13

【活動を続けていくための課題】

- ・バス停建設の資金調達（次年度以降）
- ・バス停以外の竹の活用方法の開拓
- ・地域との連携（バス停の維持管理方法）
- ・プロジェクトを継続していく仕組み（BBSのビジネス化?）

【福住がどのようになってほしいか】

- ・竹のバス停とベンチが福住のまちなみになってほしい
⇒竹のバス停とベンチが福住の新たな観光資源に

【今後、福住とどのように関わっていきたいか】

- ・バス停以外のプロジェクトにも関わりたい
(例：廃校リノベーションプロジェクト)
- ・福住でこれまでに知り合った人の活動に参加したい
(例：農業、陶芸、木工)

4. 今後の活動について Bamboo Bus Stop Project
竹のバス停プロジェクト 14

【今後の活動】

高校生・地域の人とワークショップ形式でバス停建設を進めます！

- ・竹のベンチ製作
- ・竹の壁製作
- ・時刻表製作

興味のある方・参加希望の方はBBSメンバーまでお声掛け下さい！

現在、試作品を兵庫県庁で展示しています！ぜひご覧ください！

〔フォーラム当日、会場で展示していたパネルとバス停の模型〕



(2) ミライの輪

私達は、丹波市山南町農作物認知度向上プロジェクトに取り組んでいる神戸親和女子大学の学生です。活動地域は丹波市山南町で、兵庫県中部に位置しています。私達の所属しているミライの輪は、神戸親和女子大学、神戸学院大学、甲南女子大学の学生がメンバーとなっていて、主に兵庫県内の地域で地域貢献活動を行う団体です。私達と協力していただいている久下自治振興会は『一体感あふれるまちづくり』をめざして設立された地元住民のグループです。ウォークフェスタや元旦マラソン、小物づくり教室、小学生向けの科学教室など、室内外で元気な地域づくりの特別授業を盛んに展開しています。

今年度の活動では、5月には久下自治振興会の方々とミーティングをし、ピザ釜見学をさせていただきました。7月には久下自治会館で農家の方々と顔合わせをし、神戸親和女子大学にて商品イメージづくりを考えさせていただきました。8月には神戸市中央区にて兵庫県主催のふるさと交流会に参加し、同様の事業を展開されている方々と交流をさせていただきました。10月には久下地区にて黒枝豆の試験販売体験の打ち合わせと日程調整をし、11月には黒枝豆のテスト配送をさせていただきました。

今年度の活動について、もう少し詳しくお話させていただきます。今年の5月には谷川七区の『農宴倶楽部』有志の方々によって作られた公民館横のピザ釜を見学に行きました。運営資金は有志の方々が間伐を行い、その間伐材を売ることによって工面し、昨年無事完成しました。作られたその年の収穫祭でさっそく利用して、できたてあつあつのピザが住民の方にごく好評だったそうです。昨年はピザ釜に塗装がされておらず、すごくシンプルでしたが、今年は赤く塗装したそうで、すごくかわいらしいデザインになっていました。ここ谷川七区では、数年前から宅地開発で若い世代の家族が増えてきていて、住民同士でどう交流を深めていくかが課題でした。そこで4年前に、そば作り体験で交流をしようと有志の方々によって『そばの会』が立ち上がり、これをきっかけに黒豆栽培や小豆づくりなど活動の幅が広がり、今の『農宴倶楽部』に改名したそうです。ここで行われる収穫祭もこうした世代間交流の一つとなっています。

8月には、ふるさと交流会に参加しました。各地域の方々や活動する学生の他に、様々な職業の方が参加していて、いろいろな視点から見た地域の課題解決方法がとても参考になりました。地域資源を活かした活動や他団体の連携等、5つの地域がそれぞれの課題を持ち寄り話し合いました。その中でも、どの地域にも共通した課題が『活動の担い手不足』でした。同じ学生と関わるのは長くて4年で、地域の方からすると関わる学生が次々と変わるので継続に不安をもつ意見が目立っていました。解決策として「地元の中高生をプロジェクトメンバーに」という有効な案が出ましたが、山南町の地域性を考えると他の解決策も考える必要があるかなと感じました。また、この交流会までは自治振興会の方との連絡手段は電話だけでしたが、LINEでも連絡を取ろうということになり、これ以降の活動ではLINEを使って連絡を取りました。

秋には、黒枝豆の収穫とテスト発送を行いました。ご自宅で黒枝豆を栽培していらっしゃる方のお宅を訪問して、事前に収穫して下さっていた黒枝豆の鞘取りを体験させていただきました。10月下旬ということで、実は大きく膨らんでいて、一部は黒く色付いていました。試食をさせてもらって“もっちり”として食べごたえがあり、とても美味しかったです。ここで連絡手段としてLINEを使い、価格設定や配送方法の相談をしました。実際の内容ですが、茎から取った鞘のみの重さで600グラムを、配送料510円込みの1000円で販売を決定しました。初回ということで、販売先はプロジェクトメンバーの身内や知り合いから始めることにしました。結果的には配送は一部で、多くは持ち帰りになりましたが、以前までタダで親戚に分けていたという枝豆に対価が発生したことは大きな一歩だと考えています。ただ今回であれば鞘のみの枝豆が実質490円で買えるので、安心・安全の無農薬であることに加えて、野菜の質も良く美味しいことを考えると、今後少しずつでも価格を上げる方向に進めて、地元の方にも認知してもらいたいと考えています。

新しくLINEを使って連絡を試みた感想としては、いつでも連絡できて、文字や言葉だけでは分かりにくい部分や、黒枝豆の育ち具合を写真や画像で確認できるため、非常に便利だなと感じました。一方で、注文主の方と生産者の方との仲介に手間取ってしまったという反省もあったので、今後気を付けていくべき課題も見つかりました。

これまでに地域と学内にてそれぞれミーティングをいくつか行ってきました。今年度は、地域の生産物を商品化するというので、地域では、夏には地元で農作物を栽培している住民の方々や自治振興会の方々と、商品化するにあたって予想される課題や、生産者さんと学生はそれぞれどこまでの仕事を担当するかなどの役割分担について話し合いました。

学内では、実際に段ボールを使って、その段ボールに何種類くらいの量を入れるか、加工品も入れるかなど、仮定した量で価格設定や配送方法・配送範囲をシミュレーションしました。また、パッケージもコストを抑えるためにデザインは一年中統一しつつ、地域に合ったものをパワーポイントを作ってイメージしたりしました。さらに、地元の方にどのように協力を募るか、初めの販売先はどこにお願いするかなども話し合いました。

ここで昨年度の活動との比較をしていきたいと思います。こちらは、昨年の9月に行った『久下フェスタ』の写真です。『久下フェスタ』は、私達ミライの輪と久下自治振興会の方が連携して開催したイベントです。写真スタジオで小さな子供を撮影したり、バンドが演奏するなどして地域の方々と交流を図りました。また、7月から12月は小豆作りを体験して植え付けから選別、実際に調理して実食をするなど一連の体験をしました。12月には、かるた作りや、餅つき大会を行うなどして小学校との交流を図りました。子供達が古くから久下を知る地域の方々から歴史や文化、風景についてお話を聞いて自分の日常や体験を踏まえながらかるたを作りました。餅つき大会では、子供達が一生懸命ついてくれたお餅と11月に選別した小豆でぜんざいの試食をしました。

昨年度までの活動との比較をまとめました。昨年度は、『久下フェスタ』や小豆の植え付け、選別体験、実食、小学校との交流など地域の方々と交流を深める活動が主でしたが、今年度は家庭廃棄農作物の商品化、テスト販売など交流の中で見つけた課題を解決する活動を主に進めていました。

今後の活動として試験販売の地道な継続をすべく、活動の予定をしっかりと決めるだけでなく、学生が野菜の値段を決めていくなどより深く関わっていききたいと思います。

また、今後活動に参加してくれる後輩達がより地区のことを知ってもらうために、今年あまりできなかった地域の方々と定期的な交流、イベントへの参加もしていきたいと思います。また SNS の開設や、イベント参加時にビラを配ることで地域の中や外の方にも活動を知ってもらえるような工夫をしていきたいと思うほか、自治振興会の方々と連絡をより円滑にできるように考えていきたいと考えております。以上です。

【連携先の久下自治振興会の方からのコメント】

失礼します。久下地区の清水と申します。よろしく申し上げます。私も今年初めて自治振興会に入れていただいて、そしてこういう事業があったことは知っていましたが、参加したことがなくて、今年最初に5月の打ち合わせと一緒にさせていただき、それからスタートしています。発表でありましたように、昨年度まで小学校での交流ですとか、実際に農業体験をしていただいたりしながら、新しいアイデア、知恵をお借りしたりしてきています。

そのような中で今年は一回、実際に枝豆、黒枝豆という、ここ篠山が本場ですが、丹波市でもそれぞれ農家で作っていますので、実際にどうすれば販売に結び付けられるかということでアイデアをもらいました。実際には、学生さんは農作業をやったことがないということで、「一度来ていただいて体験してもらおう」ということでやりました。あいにく台風の真っ只中で、それも10月の少し終わりですから、先ほど“もっちり”という話がありましたが、「えらい日になってしまったな」と思いました。予報は分かっていたので、前日に一度刈るだけ刈り取って、鞘のもぎ取りだけでもいいからと思って体験していただきました。でもその体験から、「こういうふうにすれば良い」とか、「農家も簡単にはできないんだな」ということを分かっていたいただきました。そして付加価値をつけていただいたり、安全・安心の農薬を使っていないということにどう価値付けをしていただけるかということにもアイデアをもらいながら、今スタートしたばかりです。実際にやっていただいて、良かったなと思っています。

あと課題としては、どうしたら学生さんに気軽に来ていただけるようになるのかです。そのあたりの連携を深めたり、それから先ほどありましたように、今 LINE を少し使い出したのですが、どのように連絡を、連携を取っていけばいい

のかなというところもこれからまだまだだと思います。最初の出町さんの挨拶にあったように、やはり協働と継続というのが大きなキーワードになるなということを改めて思っています。しかし、地域の活性化に若い学生さんのアイデアは本当にありがたいなと思っていて、これからも連携を大事にしていきたいなと思っています。

ありがとうございました。

丹波市山南町 農作物認知度向上 プロジェクト

発表者： ミライの輪、神戸親和女子大学
北結光 新見桃花
宮脇菜穂 藤原結華
玉手里於 有田美沙紀

活動地域・団体紹介

- ▶活動地域...丹波市山南町
- ▶ミライの輪
神戸親和女子大学、神戸学院大学、甲南女子大学の学生がメンバー。主に兵庫県内の地域で、地域貢献活動を行う団体。
- ▶久下自治振興会
“一体感あふれるまちづくり”をめざして設立された地元住民のグループ。ウォークフェスタ・元旦マラソンや、小物づくり教室・小学生向けの科学教室など、盛んに「元気な地域づくり特別事業」を展開してきた。

今年度の活動

- ▶5月 久下自治振興会の方々とミーティング、ピザ窯見学
- ▶7月 久下自治会館にて農家の方々と顔合わせ
神戸親和女子大学にて商品イメージづくり
- ▶8月 神戸市中央区にて兵庫県主催ふるさと交流会に参加
- ▶10月 久下地区にて黒枝豆試験販売体験の打ち合わせと日程調整
黒枝豆鞘取り体験
- ▶11月 黒枝豆テスト発送

5月 ピザ窯見学

- ▶「農宴倶楽部」有志の方々が昨年作られたピザ窯。
- ▶10月の収穫祭を盛り上げた。
- ▶最近では若い世代の家族も増え、世代間交流の場となっている。



8月 ふるさと交流会

- ▶神戸市にて、学生が進行役となり、兵庫県内の様々な地域住民の方々が地域の魅力や課題を伝え合った。
- ▶この交流会で連絡手段にLINEを追加！



10月・11月 黒枝豆収穫・テスト発送

- ▶黒枝豆を栽培している方のお宅へ、鞘取り体験
- ▶LINEを使ってテスト発送の相談
- ▶初回の価格設定、配送方法
★鞘のみ600～800g
= 1000円 (510円の送料込み)
★ゆうパック
- ▶初回販売先はメンバーの家族や知り合い
★計7件 7000円の売上



これまでのミーティング内容

- 地域にて
 - ▶7月に農家の方々と顔合わせ
試験販売について、役割や課題を話し合い
- 学内にて
 - ▶商品イメージづくり
(パッケージ、商品内容、価格設定、配送方法など)
 - ▶参加者・協力者の募集方法

昨年度の活動との比較

昨年度の活動1
久下フェスタ

- ↓地元チームの太鼓演技
- ↓写真ブース
- ↓神戸親和女子大学学生バンドの演奏



昨年度の活動との比較

昨年度の活動2
小豆に関する一連の体験

植え付け → 選別 → 実食

昨年度の活動との比較

昨年度の活動3
小学校との交流

- ▶ かるた作り
- ▶ 餅つき・ぜんざい作り

昨年度までの活動との比較・まとめ

<p>昨年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 久下フェスタ ▶ 小豆の植え付け・選別体験・実食 ▶ 小学校との交流 	<p>今年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 家庭廃棄農作物を商品化、テスト販売
---	--

地域の方々と交流を深める活動 → 交流の中で見つけた課題を解決する活動

今後の活動

- ▶ 試験販売の地道な継続
- ▶ 地域の方との定期的な交流
- ▶ 連絡手段のさらなる改善

(3) AGLOC

それではAGLOCの発表を始めさせていただきたいと思います。ここにピンが22本あります。これは一体何でしょうか？誰か手を挙げて、是非答えていただきたいと思うのですが。そこの服を着ていらっしゃる女の方、どうですか？このピン何だと思いませんか？

(女性)「AGLOCに参加した外国の数？」

そうなんです。22か国81人、これが設立から一年半の間に我々AGLOCと一緒に活動してくれた留学生の出身国、そしてその参加人数です。いろいろなところがありますね。この国旗全部、うちのサークルで受け入れさせてもらった国の国旗なのですが、22か国、ちゃんと数えていただいたらあると思います。

私達AGLOCは、「まだ見出されていない地域の魅力を世界に伝えたい」、「地域と世界を結び付け日本の農林水産業をもっと元気にしたい」、このような思いで『地域と世界を繋ぐ』という理念を掲げ留学生と活動してきました。それでは私達の今までの活動の軌跡、そしてこれから描く活動の未来をご覧ください。

私達の活動は大きく、『地域から世界へ』『世界から地域へ』『地域と世界を双方向』に繋ぐ、三つの活動に分けることができます。

まず一つ目、下の青い所ですね、『地域から世界へ』の活動について見ていきます。まず一つ目ですが、海外農業視察ということで、ベトナム、台湾の農家さんのところにお世話になりました。これは、地域と世界を繋ぐという意味で、「世界のことを知らないとダメだろう」ということで行っております。その活動を通して日本と世界の違いを認識させていただきました。続いて、特産品開発です。これに関しては『ChoKobe』、そして『ヤマノイモパンケーキ』が挙げられます。『ChoKobe』ですが、去年神戸大学生と篠山フィールドステーションが連携して開発したもので、今後『ChoKobe』をどう拡大していくのか、どこで売っていくのかということは今考えております。これに我々のサークルに所属する留学生が積極的に関わってくれていて、売っていくにあたって海外の人からの視点というのはかなり重要になるかなと思います。『ヤマノイモパンケーキ』も実際開発するにあたって、留学生の方の意見を取り入れたりしています。

続いて『世界から地域へ』の活動について見ていきます。まず世界から来た留学生に地域の魅力を伝え、AGLOCの活動に興味をもってもらうため、留学生を対象にした『Welcome Camp』を行っております。今年ちょっと台風でいろいろとぶっ飛んだのですが、なんとか開催することができました。今年台風の影響で地域の皆さんとの交流ができませんでしたが、去年は留学生と地域の方との交流を図っていただいたりしています。もう一つ、小学校交流ということで地域の小学生と留学生の交流、異文化交流という形で一緒にイベントを開催し、好評をいただきました。続いてインバウンド誘致です。まだ知られていない日本の地域の魅力を世界から来た人々に伝えたいという思いで観光プロジェクトを立ち上げています。『Huber.(ハバー)』というガイドマッチングアプリの会社と連携させていただき、今は京都などでガイドの練習を積んでおります。将来的には、留学生や外国の方を篠山に連れて行きたいという目標があります。そして今年度は、『篠山観光プロジェクト』というものをさせていただきました。神戸大学で、篠山観光のようなプログラムがありまして、そのお手伝いをさせて頂いております。

最後に3つ目、『地域と世界双方向』に行っている活動についてです。まず、我々の活動の軸として農業ボランティアを月に一回させていただいています。ここに留学生を呼んで一緒に活動しようという意味でやっていますが、実際に活動が終わった後に留学生にfacebookや他のSNSを通して、英語で地域の魅力を発信してもらったりしています。その中でも注目したいのがこちらです。(→動画が流れる)

今の動画ですが、何語か分かりますか？タイ語です。実際にAGLOCに所属しているタイの留学生がこの動画を作りました。制作者は女性の方ですが、彼女も篠山という地域に魅力を感じてこういう動画を作って世界に発信してくれています。

最後に『IAAS』への参加ということで、『アジア農学系学生会議』というものに参加してきました。これはヨーロッパ

を中心に 52 か国が加盟しており、これへの参加をすることで『IAAS』を通して相互に情報を共有しつつ、この繋がりを継続して活動の方向を広げていきたいと思っております。

さて、AGLOC いかがでしたか？ 私達の小さな繋がりが紡ぐ糸はとても細いものです。それでも紡ぎ続ければ束となり、いつかは丈夫な架け橋となる。私達はそう信じ、これからも歩み続けます。地域と世界を繋ぐ農業の未来のために。

ご清聴ありがとうございました。

というところまでが我々の活動発表ですが、「一体全体何をしてるんや」と、「なんで留学生を呼んできてわざわざ農業をする必要があるんや」とか、皆さん思ったのではないかと思います。今までの堅い活動発表を聞いてきてそう思った方もいらっしゃると思いますが、これには私達一応理由がございます。私は実は三年間篠山にずっと入らせていただいているのですが、農業を守るという施策だけでは、やはりこれから守っているものがどんどんなくなっていくという状況が続いていくと思うのです。その中で政府としても攻めの農業という施策を実行していますが、我々の作った留学生との絆が、攻めの農業、インバウンド需要の獲得や、輸出の促進などで篠山市にとって必ず大きな力にこれからなっていくと信じています。だからこそ我々はこんな小さな活動を行っていくことで、世界との繋がりを紡いでいくことで、きっとこれからの農業の発展に貢献をしていけるのではないかと、そういう思いでやっています。

こういう活動ができたのも、丹波県民局の皆様や、地域の方々、岡野ふるさとづくり協議会の方々などいろいろなご協力をいただいたからです。この場を借りて御礼申し上げて、AGLOC の発表とさせていただきます。ありがとうございました。

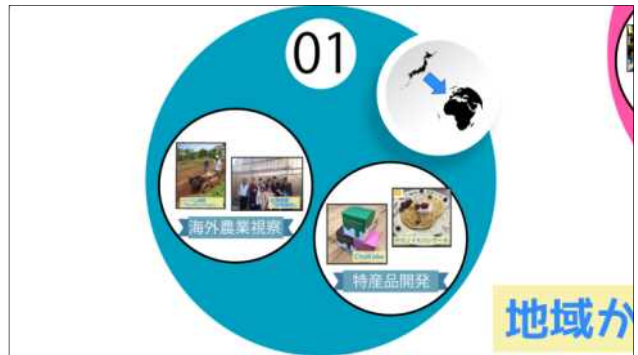
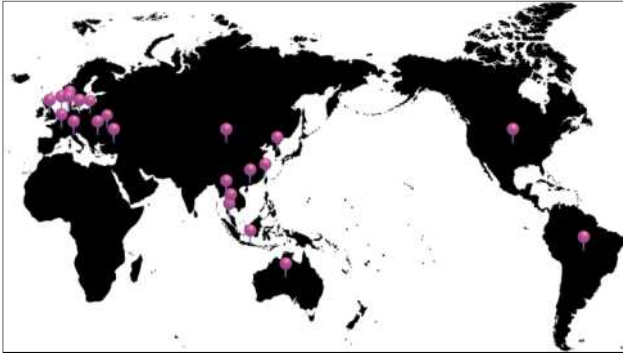
〔連携先の岡野ふるさとづくり協議会の方からのコメント〕

岡野ふるさとづくり協議会の吉田と申します。今大変グローバルな発表をしてくれましたので、なかなか地域からのコメントは難しいですが、実際に今最後に発表者の阿部くんが言ってくれましたように、やっぱり特産物がだんだん衰退しているというあたりは私達が一番危機感を持っているところです。

先ほど講師の先生が仰っていたように、60 年前に篠山の中心にある岡野地域の中に兵庫県立農科大学がありました。兵庫県立農科大学の先生方と地域の農家が開発をして、山の芋がこの篠山に非常に適しているということで栽培が始まったという私達は聞いています。その中でも岡野地域は、非常に山の芋に関心を持たれた地域で、多い時には非常にたくさんの方々の農家の皆さん方が山の芋作りに精を出されました。しかし最近では、5~6 年前と現在を比較しましたら半減しています。半減しているということは、山の芋を作るには非常に手間がかかる、苦労がかかるのです。前の秋に田んぼを鋤いて、そして冬の凍てに土を細かくして、山の芋がじっとその布団の中で大きくなるように土作りをする。そして 3 月に植えて、4 月 5 月からは消毒やら藁敷き、そして暑い時には草引きをします。なかなか除草剤はできません。つるがありますので、その中を草引きをしなければならぬ。こういう非常に手間がかかることを皆さん嫌になってだんだんしなくなり、少子高齢化で今はもう山の芋を作っているのは 60~70 歳以上くらいばかりです。

その中で若い人達が、一昨年の平成 27 年に授業で山の芋について実践農業をして、平成 28 年度も続いて AGLOC の皆さん方が山の芋の農家に実践農業をやろうということで協力してきました。今年はちょうど山の芋と黒豆の栽培ということになりました。地域が期待しているのは、若い人達がこれから成形外の山の芋の価値をどう高めるかです。丸いものが出荷できるのですが、曲がったものはなかなか出荷できません。こういうことが大きな課題でした。今発表してくれましたように、こういう成形外の山の芋でパンケーキを作ったり、また擦って粉にして『ChoKobe』という商品を開発してくれました。このように若い人の考え方で新しい商品を作ってくれたということで、非常に私達は感心または感謝をしています。もう一つは手間の問題をどのように省略化していくか、ということが山の芋の栽培にとって非常に今課題なのです。そういうことも今後私達は、どういう研究をしていけばその分は省略ができるかということも合わせて、AGLOC の皆さんに期待をしているところです。

今後ともひとつお世話になりますが、よろしくお願ひ申し上げたいと存じます。ありがとうございました。



地域との交流!

Welcome Camp

小学校交流

留学生の巻き込み

地域の魅力体験!!

観光プロジェクト

篠山観光補助

インバウンド誘致



留学生が英語で紹介

農業ボランティア

地域動画の撮影

世界との 情報共有・意見交換

IAAS

アジア留学系学生会議への参加

IAASへの参加



(4) おくものがたり

こんにちは。おくものがたりの発表をさせていただきます。神戸大学2回生の磯脇琢磨です。おくものがたりというのは、去年の『実践農学入門』という神戸大学の授業を基に作られたサークルなのですが、活動内容に3つの柱を掲げています。

まず1つ目が資源利活用です。大芋地区には廃校になってしまった綺麗な小学校(旧大芋小学校)があるのですが、廃校になったと言っても本当に綺麗な学校です。自動ドアがあり、トイレは自動で、家庭科室や実験室も全て備わっていて、ピアノやオルガン等も何台あるか分からないくらいです。楽器は現在、他の学校で再利用されています。グラウンドも十分に使えて、ソフトボールの練習などをしている団体が結構います。

2つ目が地域交流です。これは、まず僕達学生と地域の方との交流です。そして地域の方と外の方との交流です。例えば大芋地区は農村地区なので、農家さん達は消費者の方と直接繋がりたいという思いがあるようです。その部分の仲介役を僕達ができればいいなという思いでこの柱を掲げています。

最後に農業振興です。その農家さんと消費者を繋ぐというのも農業振興の一つですが、大芋地区は他の地区に比べて特出する産物物というものがありません。例えば、岡野地区の山の芋や、川北の黒枝豆などのように、もともとそこにこの農作物があるという原産地ではありません。どちらかというと獣害、獣が多くて作物を結構食い荒らされたりすることが多いです。そういうことを僕達が農業振興で対策を立てていくことができれば、と考えています。

おくものがたりは今年新設されたばかりの団体ですが、人数が今年度に入って増えました。今までは2回生の10人くらいでしたが、本当につい2ヵ月くらい前に1回生が10人くらい入ってきて、現在22人です。交流の頻度は、交通の便があまり良いとは言えないので月に1~2回です。

前期の今日までの活動スケジュールの紹介をします。6月は、大芋は山に囲まれて川が綺麗で、ホテルがすごく綺麗に見えますので、それを見に行きました。8月には、大芋の中の地区の一つに市野々という地区がありますが、そちらの夏祭りの運営に携わったり、カラオケ大会に参加させていただきました。3つ目にあるのは、9月末の2泊3日の『通学合宿』です。地元の小学生が、木曜日の朝に小学校に行って、旧大芋小学校に「ただいま」と帰って来ます。僕達が出迎えて一緒にご飯を作って、勉強を教えたり遊んだりします。そしてその日は、そのまま旧大芋小学校で寝てもらい、朝一緒に起きて、皆で小学校に通学するという合宿を2泊3日で行いました。その『通学合宿』の時に、僕達が旧大芋小学校を使って夜に肝試しをしました。学校で肝試しなんて、あまりしたことがないですね。保護者の監視の下で、お化け屋敷を小学校の中で作ったという感じです。せっかく綺麗な小学校が残っているので、雰囲気が出るので良いかなと思って急遽行いました。11月には『大芋文化祭』がありました。僕達のサークルには外国人はいません。だからAGLOCのように世界地図にピンを刺そうとしても、多分日本に1個あるだけです。「これ、何のピンですか?」と聞いても「なんか、日本を刺していますね」と言われます。でも、外国人はいませんが、メンバーの過半数が海外に留学したことがあります。その経験を活かして、この『大芋文化祭』では留学した先の国のクイズ等をして、観客の皆さんには楽しんでいただきました。今日もちょうど大芋でクリスマス会があるのですが、そちらの方ではメンバーが多分サンタのコスプレをしてケーキでも作っているのではないかと思います。

これが今後の活動スケジュールです。2月に蕎麦打ちや味噌づくりを予定しています。そして、皆さんに「一緒に参加しませんか」という提案をしたいのですが、『篠山学生生活動団体大運動会』というものを発案しました。

この丹波篠山地域には地域で活動しているサークルが10団体ほどありますが、その団体ごとの交流が少なく、各々の活動内容を把握できていないと感じています。僕達が活動しているのは大芋なので、大芋のことはそこそこ分かります。もちろん他の団体の方々も自分達が活動している地域のことはよく分かると思いますが、他の団体が活動している地域のことはあまり知らないと思います。ですから、例えば篠山全体を良くしたいと思っていても、一地域しか知ることがないのであれば、篠山全体のために何かをすることは難しいのではないかと思います。交流の場を広げたいと思いました。

大運動会を開催する目的は、丹波篠山地域で活動している学生団体の交流を行い親睦を深めること。親睦を深める土台を整えた上で、今後の丹波篠山地域のためにできることの幅を広げていくこと。例えばこれは、今日の感想用紙にある『一緒に取り組みそうなこと』です。僕達と他の団体でコラボレーションして商品開発や販売場所を提供したり、例えば獣害対策を他にもされている団体もあるので、そちらの方で意見をお互いに取り入れたりできれば良いと思います。そして、おくものがたり以外の学生団体の方々にも大芋の良さと旧大芋小学校の利便性を知ってもらいたいなと思いました。本当にすごく綺麗なのでは是非皆さん来てください。ブランコを漕げますよ、大学生なのに。現在のところ開催時期は2月から3月上旬を考えています。場所は、旧大芋小学校です。大芋のことを知ってもらいたいので。対象は丹波篠山地域で学生活動を行っている団体、フォーラムに参加している皆さんの団体です。

概要としては、各サークル対抗で運動会を行うか、または今日みたいに各サークルをバラバラにしてチームを作って交流を深める。この運動会の合間にお互いの意見交換などをできたら楽しいかと思います。課題としては、参加者の誘致や各団体の「篠山全体に貢献したい」という人もいれば、「自分達の活動地域だけに貢献したい」という人もいますので、そのあたりの意識の差異かと思っています。旧大芋小学校への交通経路ですが、こちらは人数さえ集まればバスを使うこともできると思いますので、今後調整していきたいと思っています。競技種目や道具の準備等も検討していきます。

発表は以上です。ご清聴ありがとうございました。

【連携先の大芋活性化委員会の方からのコメント】

大芋活性化委員会のみらいプロジェクトのメンバーです。山下と申します。どうぞよろしく願いいたします。おくものがたりのサークルは『実践農学入門』の授業のあとサークルとして立ち上げていただき、神戸大学の若い皆さん方のエネルギーを大芋に注いでいただいているということで感謝しています。先ほどありましたように、今日は大芋地区のクリスマス会がありましたので、会長や事務局長が不在です。申し訳ありません。ですから、私が代表させていただいております。

大芋小学校は平成27年度、2年前に閉校しまして、地域のシンボルである大芋小学校がなくなりました。普段、遠い、暗い、寒いという大芋のイメージでしたが、やはり大芋小学校がなくなったということは、地域の灯が消えたような状況で、その活性化に向けて活性化委員会は大芋のまちづくり協議会を中心にどのような方向性で行ったら良いのかと悩んでいる矢先です。

その時にこのような形でたくさんの大学生の皆さんが入っていただいて、共に地域資源である学校の利活用を考えていこうと言ってくださるのが本当に頼もしく、嬉しいことです。なかなか地域の中に若者がいないということもありますので、若い大学生が入っていただく、地域のイベントへ参加していただくだけでもありがたいと思います。先ほど発表されました『通学合宿』も2年前になくなってしまったので、まちづくり協議会としての『通学合宿』を行っていませんでした。しかし、久しぶりに旧大芋小学校で開催をしてくれまして、本当に子供達が楽しく過ごさせていただきました。

大芋は何もないところですが、けれども、人と自然がとっても豊かで、どこの地区にも負けない人がいて、自然があると思います。その中で活性化に向けてこれからも一緒に考えていただければ嬉しいです。そして今発表されましたけれども、大運動会を開催していただくということを聞きました。大学生の皆さんが入ってくださって、いっぱい暴れていただいて、旧大芋小学校をいっぱい使っていただいて、これからの方向性も皆さんで考えていただければ本当に嬉しく思います。

今後とも、どうぞよろしく願いいたします。



活動内容

資源利活用



地域交流

農業振興

おくものがたり構成

今年新設されたばかりで全員が神戸大学1,2回生

今後はイベントを運営企画していく



計22名



交流の頻度

学生主体の企画はほとんどを神戸大学にてミーティングを行い、大芋地区を訪れるのは本番と事前ミーティングのみ

そのため、交流の頻度は月1~2度

活動スケジュール（前期）

- 6月10日 ホテル観賞&交流会（宿泊）
- 8月19日 市野々夏祭りに参加（宿泊）
- 9月28-30日 通学合宿（2泊3日）
- 11月5日 大芋文化祭
- 12月17日 大芋クリスマス会に参加

※繁忙期は農業ボランティアも行った。



活動スケジュール（後期）

- 1月中旬 新年会、雪合戦
- 2月上旬 そば打ち
- 2月中旬 味噌づくり
- 2月~3月上旬 篠山サークル大運動会
- 3月中旬 ひな祭りに参加

※繁忙期は農業ボランティアも行う。



❖篠山学生活動団体大運動会❖

ぜひ参加してみませんか？
一緒に企画してみましょう。

【現状】

・丹波篠山の中には大学生サークルが10団体ほどあるが、交流は少なく、各々の活動内容もあまり把握できていない。

・活動拠点以外の地域のことをあまり把握できていない。

❖篠山学生活動団体大運動会❖

【目的】

・丹波篠山地域で活動している学生団体の交流を行い親睦を深める。

・交流の土台を整えて、今後の丹波篠山地域のためにできることの幅を広げていく。

・「おくものがたり」以外の学生団体にも大芋の良さや旧大芋小学校の利便性を知らってもらうため。

✿篠山学生活動団体大運動会✿

【開催時期】
2018年2月～3月上旬

【開催場所】
旧大芋小学校（兵庫県篠山市中500）

【対象】
丹波篠山地域で学生活動を行っている団体

✿篠山学生活動団体大運動会✿

【開催概要】

①各サークル対抗の運動会を旧大芋小学校を用いて行い、交流を深める

②全サークルをバ[＊]ラバ[＊]ラにしたチーム分けて[＊]同じ[＊]ように運動会を行い、交流を深める

【課題】

- ・参加者の誘致
- ・各団体の意識の差異
- ・大芋小学校までの交通経路
- ・競技種目や道具の準備



(5) 神戸山手大学歴史文化ツーリズム研究会

皆さん、こんにちは。私達は、神戸山手大学歴史文化ツーリズム研究会です。今から今年度の活動について発表します。よろしくお願いたします。

目次はスライドのとおりです。私達研究会は、観光文化学科の4年生11人と3年生10人で構成しています。主な事業目的は、獣害対策の支援や、鹿を観光資源として活用するイベントの実施、そして祭礼参加による地域活性化への貢献です。

今まで実施した活動と今後の予定は、ご覧のとおりです。5月から11月まで5回の交流会、3回の祭りへの参加、3回イベントを行いました。今後は2回の交流会を開き、次年度の課題について意見交換する予定です。

では、これからそれぞれの活動について報告します。まずは、お祭りについてです。7月29日に『水無月祭』に参加しました。『水無月祭』は夏の風物詩である伝統的な祭りです。川原集落と福住中集落に学生が参加し、住吉神社で集落の人達と交流をしながら、山車をかかせていただきました。8月5日に『納涼祭』に参加しました。『納涼祭』は、福住地域の住民の交流を深めているお祭りです。私達は、鹿肉焼きそばを販売しました。売上は50食です。8月31日に『八朔祭』に参加しました。『八朔祭』の前には勉強会にも参加し、『八朔祭』について勉強しました。4集落に学生が参加し、集落の人達と交流しながら山車をかかせていただきました。お祭りを通して現地の人達と交流を深められた上、福住の魅力を知ることができました。伝統を維持する大切さも学びました。さらに留学生にとっては、日本文化を味わうことができました。

次に、まち歩きの企画と大学祭について報告します。兵庫ツーリズム協会主催の『ひょうごのまち歩き』企画に応募しました。福住の空き家問題を考えながらリノベーションされた古民家を歩くコースと篠山の田園風景を歩くコースの2つを企画しました。そして今回は福住の歴史的町並みを歩くコースに2名の方が参加してくださいました。まち歩きを通して、他の方に説明しつつ福住を回る機会がとても良い経験になりました。こちらが、先ほどのまち歩きの様子です。

次は11月11日、12日の土日2日間で行われた大学祭について説明します。篠山、福住産の材料を使った鹿焼肉丼を出店しました。スクリーンに映っている右側の方に作物を提供していただきました。去年は166食販売しましたが、今年はそれをさらに上回り180食を販売することができました。去年の大学祭で鹿焼肉丼を食べてくださった方が今年もまたリピーターとしてたくさん来てくださったり、小さな子供も「美味しい」と食べてくださって、とても嬉しかったです。少しだけですが、鹿肉について知ってもらえたかなと思っています。

続いて『シカフェス』についてです。12月9日にささやまの森公園で『シカフェス』というイベントを実施しました。『シカフェス』とは、丹波篠山で起きている獣害問題をより多くの人知ってもらうために計画したお祭りで、若手猟師の方が語る体験談や鹿にまつわるお話を始め、鹿肉の料理、鹿の角の加工体験などを実施しました。こちらは、『シカフェス』の打ち合わせの様子です。会場の場所確認や当日の流れを地元の方と確認しました。また、この日に鹿の解体も実際に見せていただきました。こちらは、『シカフェス』当日の風景です。こちらは、若手猟師さんによる鹿のお話、質問コーナーの様子です。猟師になって良かったと思うこと、猟師になって大変だったこと、学んだことなど数多くの質問をいたしました。質問を終えた後は、若手猟師さんも交えて鹿クイズを行いました。参加者の方も積極的に参加してください、鹿の生態について理解が広がりました。こちらは、鹿肉を使った料理体験の様子です。参加者の方も協力して鹿肉もみじ鍋と鹿肉キーマカレーを作りました。調理したあとは、皆さんと昼食として美味しくいただきました。こちらは、その昼食の様子です。こちらは、鹿の角の加工体験の様子です。鹿の角を使ってアクセサリーを作りました。作り方は簡単で、鹿の角を輪切りし、中心に穴を開け、その穴にビーズやドライフラワーを入れ、レジンを流し込み固めました。こちらがその現物です。小さくて見えにくいかもしれませんが、もし興味があれば、私のところに来ていただければ直接お見せいたします。とても綺麗なものになっています。『シカフェス』の様子は後日、神戸新聞と読売新聞に掲載されました。普段こういったことに馴染みのない方々に、獣害について知ってもらう良い機会となりました。

地域の方々との交流についての報告をしますと、私達は今年、地域の皆様と5回の交流会を催しました。5月には自己紹介、福住散策、6月は川原町散策、黒豆の種まき体験、7月は意見交流会、8月は『八朔祭』の説明会、11月は先ほども言ったとおり『シカフェス』の打ち合わせを行いました。地域の皆様の温かい歓迎と応援を得て、私達は常に感謝の気持ちを忘れずに活動してきました。鹿肉料理の試食会を兼ねての意見交換会で、福住での暮らしや食肉の大切さ、そして獣害の深刻さなどのお話を伺いました。私達はこの交流会を通して地域の方々といかに行動し、活性化に繋げていくか、この1年間模索してきました。

最後に、これまでの成果と今後の課題についてご報告します。お手元に配られている資料を見ていただくと分かりますが、このように様々な活動をしてきました。その中で特に得られた成果は、様々なお祭りに参加して盛り上げたり、伝統文化の維持に貢献できたということと、何よりも地域の皆様と交流を深められたということが大きいと思います。今後の課題としては、一つは福住を訪れる人を増やすということです。移住への流れをどうすれば良いかや、SNSや新聞、チラシなど広報や集客の方法を考えたりすること。もう一つは獣害対策と鹿の資源化のリンクを考えることで、鹿のイベントの定着化や猟師の後継者不足へのアプローチなどを今後も考えていきたいと思ひます。

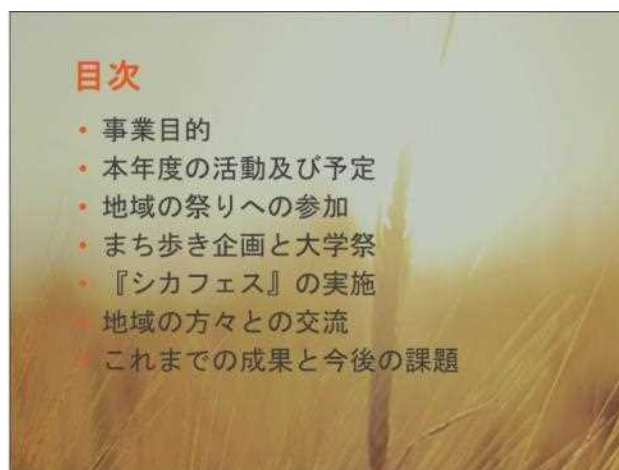
これからも頑張りたいと思ひますので、よろしくお願ひします。

〔連携先の川原自治会の方からのコメント〕

神戸山手大学のツーリズム研究会の皆さん、今年もいろいろ取り組んでいただき、ありがとうございます。3年続いて活動内容もより充実してきているなと思ひます。祭りへの支援や地域での取り組み、課題等についても真剣に向き合って取り組んでいただいていること、厚くお礼申し上げたいと思ひます。ただ、神戸から福住まで来るのに非常に遠いので、また天候の関係で雪が降って授業が中止になったり、台風が来たりということで、そのような場合に臨機応変な対応が今後も必要なということを感じております。

それと少し気になるのは、大芋で活動されている皆さん（おくものがたり）から同じ志を持っている、例えば獣害で取り組んでいる学校もあるのであれば連携してやっていったらどうか、という発言があったことと、定住に関する取り組みです。篠山市内も全国と同じようにどんどん人口が減ってくるという中で、増えているのは鹿と猿と猪という感じですが。普段からの獣害対策と人口問題、どんどん人口が減ってくる中で特に東部地域が減少傾向にあるので、移住に向けて何か提案を考えていくとか、空き家などの問題も含めて今後も考えていただけたら嬉しいと思ひます。

またよろしくお願ひいたします。ありがとうございました。



事業目的

・人数構成

➢ 神戸山手大学 現代社会学部 観光文化学科
3年生：10名 4年生：11名

・活動目的

- 獣害対策を支援し、農作物への被害を減らす
- 鹿を観光資源として活用するイベント実施を目指す
一食に関する体験、角・革の加工体験など
- 祭礼に参加して地域活性化に貢献する

本年度の活動及び予定

5月13日	新メンバーの現地視察 地元住民と意見交換	10月9日 10月14日 10月27日	まち歩きin福住（考察・試行） まち歩きin福住 鹿肉丼の試食会
6月10日 6月17日	審査会 獣害対策のお手伝い イベント実施に向けた打ち合わせ	11月11・12日 11月25日	鹿肉丼のため大学祭での鹿肉丼販売 イベント実施に向けた打ち合わせ 鹿解体体験
7月22日 7月29・30日	獣害対策のお手伝い イベント実施に向けた打ち合わせ 水無月祭への参加（宿泊）	12月9日 12月17日	シカフェス 中間報告
8月6・7日	納涼祭への参加（宿泊）	2018年2月	鹿肉料理を食べながら交流会
8月31日・ 9月1日	八朔祭への参加（宿泊）	2018年3月	今年度の活動報告 次年度の課題について意見交換

地域の祭りへの参加

水無月祭への参加（7月29日）



【水無月祭】
福住の夏の風物詩である伝統的な祭り。
住吉神社に各集落から5台の山車が奉納される。
【活動】
川原集落と福住中集落に参加し、一緒に山車をかかせていただいた。

納涼祭（8月5日）



【納涼祭】
福住地域の住民の交流を深める住民手作りのお祭り
【活動】
オリジナル「シカ焼きそば（塩ダレ味）」の販売
⇒50食完売！
お祭りの競技に参加⇒優勝(^^)

八朔祭（8月31日）



【八朔祭】
豊作を祈願する福住の秋の風物詩。
7集落が手作りの「造り山」を熊野神社へ奉納する。
【活動】
二ノ坪、箱谷、小野新、小野奥の4集落で山車かきに参加させていただいた。

お祭りへの参加を通して

- ・地域の人たちと交流を深めることができた
- ・伝統への想いとその魅力を知ることができた
- ・日本の文化を体験することができた（留学生）
- ・伝統の維持の難しさも実感した



まち歩き企画と大学祭

兵庫ツーリズム協会主催
「ひょうごのまち歩き」企画に応募

福住の歴史的町並みを歩くコース

空家問題を考えながら、リノベーションされた古民家を見学する



篠山の田園風景を歩くコース

波々伯部神社からゆったりと田園風景を歩き、「里山工房くもべ」で昼食を楽しむ



まち歩き
～福住の歴史的町並みを歩くコース～

- ・実施日：10月14日
- ・コース：森の風土～住吉神社～わだや～さんばやひぐち～ゲストハウスやなぎ
- ・参加者：2名



大学祭での出店

- ・実施日：11月11・12日（2日間）
- ・メニュー：鹿焼肉丼（500円）
- ・材料：鹿肉（篠山産）、米・玉ねぎ（福住産）
- ・販売数：180食（初年度147食→去年166食）



『シカフェス』の実施

「シカフェス」について

期日：2017年12月9日
場所：ささやまの森公園
目的：害獣から資源へ
内容：
 > 猟師の方の話
 > 鹿肉の料理体験
 > 鹿の角を使ったアクセサリー作り体験



事前打ち合わせ

- ・ささやまの森公園の施設を確認
- ・地域の方および猟師の方と話し合い、詳細を確認
- ・猟師の方がさばく鹿の解体も見学
- ・当日の鹿肉料理を試作し、試食会を実施。
⇒たいへん美味しくいただきました



12月9日 シカフェス当日の風景



地元の若手猟師さんのお話&鹿クイズ



鹿肉を使った料理体験



鹿肉料理を食す・・・



鹿の角 加工体験

大人から子どもまで楽しんで作って頂きました！



神戸新聞と読売新聞に掲載されました！



地域の方々との交流

地域の方々との交流

5/13	・福住見学と自己紹介 ・鹿肉料理の試食会(焼肉)
6/17	・河原町の重伝建地区を見学 ・黒豆の種まき体験
7/22	・「里山工房くもべ」で昼食とまち歩きの打ち合わせ ・森の風土で意見交換会と鹿肉料理の試食会(串焼き、焼きそば)
8/23	・「八朔祭」の講習(小野新集落)
11/25	・「シカフェス」の打ち合わせ ・鹿の解体 ・鹿肉料理の試食会(もみじ鍋、キーマカレー)



地域の方々との交流

- 福住での暮らしや伝統文化、獣害の実態とその対策の苦労などのほか、猟師の方からは食育のお話を伺った。
- 交流会では、地域の方々の温かい歓迎を受け感動、感謝！



これまでの成果と今後の課題

これまでの成果

活動	得られた成果
交流会	<ul style="list-style-type: none"> • 地域の人たちとの親睦を深めた • 地域の課題を再確認することができた
お祭り (水無月、納涼祭、 八朔祭)	<ul style="list-style-type: none"> • 地域の祭りを盛り上げることができた • 伝統文化の維持に少しでも貢献できた • 地域の若い世代と交流できた
まち歩き	<ul style="list-style-type: none"> • 福住の魅力を伝えることができた • 地域の課題とリノベーションの魅力を伝えることができた
大学祭	<ul style="list-style-type: none"> • 鹿肉の美味しさを神戸の人に知ってもらうことができた • 3年目に入って鹿肉リピーターが増えてきた
シカフェス	<ul style="list-style-type: none"> • 鹿を使った様々な体験から資源化を考えるきっかけを提供できた • 獣害問題についても理解を深めてもらった

今後の課題

- 福住を訪れる人を増やす
 - ⇒ 関係人口へ
 - ※ 移住への流れ
 - ※ 広報、集客の方法
- 獣害対策と鹿の資源化のリンクを考える
 - ※ シカイベントの定着化
 - ※ 猟師の後継者不足へのアプローチ

これからも頑張ります！！



(6) 地域密着型サークル にしき恋

地域密着型サークル にしき恋の発表をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

まず、にしき恋は2012年神戸大学農学部開講の『実践農学入門』という授業を通じてお世話になった篠山市西紀南地区の方々と今後も交流を続けたい、力になりたいとの思いから設立され、今年で5年目です。構成人数は、12月3日現在新入生、学部を卒業した大学院生、学部生を合わせた合計が152名で、大規模な団体となっています。また、少数ですが神戸大学以外の学生もいて、学部についても神戸大学の全学部生が構成員に含まれています。さらに、これ以外にも大学を卒業した社会人の方々も度々活動に参加してくださっています。

活動内容としては、毎週末地域の農家さんのお手伝いをする『農業ボランティア』、耕作放棄地をお借りして丹波黒大豆や野菜などを栽培して販売する『農作物の生産と販売』、『地域の方々との交流』、この3つを基本的な活動として様々な取り組みを行っています。

ここからこの3つの活動に基づいて、今年度の活動の報告を行っていききたいと思います。まず、『農業ボランティア』についてですが、この活動では実際に地域の方と直に接することで、農業の実践的な知識はもちろんですが地域の抱える課題を知って、農家さんと語り合うことができます。今年度は、12月3日現在延べ1,108名もの学生が参加し、昨年度の同時期に比べ約100名増えています。受け入れ農家さんの数も昨年よりも増えました。また、にしき恋ができてからの5年間で延べ5,000名もの学生が西紀南地区に足を運んでいたことが分かりました。農業ボランティアを通じて本物の農業に触れることで、辛さだけではなく農業の魅力や楽しさを感じることができます。さらに、他大学で活動している学生団体の方、例えば鳥取大学や県立広島大学などの団体の方々、にしき恋に参加していない神戸大学生も農業体験という形で10月から12月の間に、にしき恋メンバーと共に農家さんのところでボランティアを何度も行っています。農業や篠山の魅力を普段篠山に関わりのない若者達にも知ってもらえる活動を行っています。

『農作物の生産と販売』についてですが、地域の耕作放棄地をお借りして特産品である黒大豆や各種野菜を栽培しています。黒大豆に関しては生産から製品化、販売までを地域の方々の助けを借りながら、学生が自分達で行っています。この活動は毎週末の農業ボランティアで得た知識の実践の場であると同時に学生の斬新なアイデアを実行する場でもあります。栽培や製品化の流れでは、経験のない学生が苦勞をしながら作業をすることで、販売までに必要な能力を実感しています。販売に関しては、今年度6つのマルシェや神戸大学内で販売をし、1店の食品店に卸売りを行いました。黒大豆の販売方法は、多くの方が行っている枝付きではなく、鞘のみで販売をしています。新大阪や三宮などの都市部でマルシェ販売を行い、様々な方々に特産品である黒枝豆や篠山について知っていただけたと思います。また学内での販売では、購入した学生が篠山での体験ボランティアに参加したケースもありました。

『地域交流』についてですが、この活動で普段の農業ボランティアで交流のある農家さんに限らず、幅広い世代との交流を深めています。その一つが地域の小中学生との交流です。一昨年から始まった小学生との交流は、最初は小学校からの依頼を受けて行っていましたが、今では西紀南まちづくり協議会のご協力のもと、学生が主体となって年に4回ほどイベントを行っています。また中学生との交流は、今年度から小学生との交流を見た中学校からの依頼によって始まり、勉強会や中学生と一緒に農業ボランティアを行うといった活動もしています。他にもたくさんの地域行事に参加させていただいています。農業祭や秋のお祭りなどでは、運営のお手伝いや御輿の担ぎ手として参加し、学生と地域の方との絆が深まっています。また毎年2回ほど行っている懇親会は、学生が企画し地域の方々に参加していただくという形を取っており、年々参加される方が増えています。その結果、私達のことを知っていただき、新たなボランティアの受け入れ先となってくださった方もいます。先ほど他のグループから農家さんとの繋がりに関する質問がありましたが、こういった地域の方との交流で農家さんとの繋がりができて、そこで黒枝豆の販売方法を聞いたり、アドバイスを受けたということもあります。

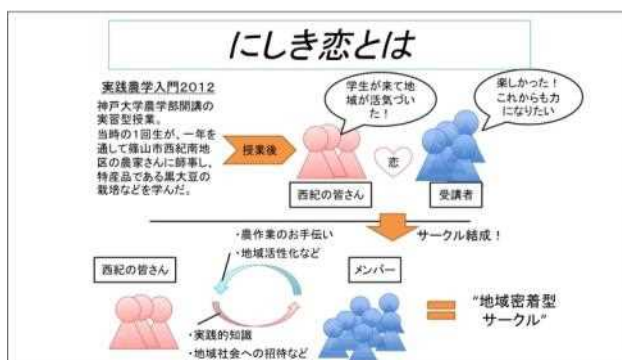
活動のアウトプットとしては、TwitterやFacebookといった公式SNSがあったり、ホームページ、そして春と秋に

作成する冊子があります。Facebook では毎週末、農業ボランティアの活動報告を毎回参加した学生が書いてアップしています。また冊子については、春は新入生向けに作って、秋は黒枝豆を買ってくださった方向けに篠山の魅力や私達の活動、取り組みについて掲載しています。2月には年度末の報告を地域の方々に対して行っています。ここでは、私達の取り組みを地域の方々へ報告するとともに、その結果を踏まえた議論や提案も行っています。その一例としては、私達が取り組む「黒枝豆を鞘のみでの販売する」という提案があります。提案を受けて、実際に販売方法を鞘のみに変更された農家さんもいらっしゃいます。また、今年度は東京で開催された『食と農林漁業大学生アワード』という大会において、にしき恋の活動をたくさんの人に発表し、高い評価をいただきました。このように地域内に対しても、地域外に対しても、活動を積極的にアピールするように心掛けています。

これまでの活動を通じて、昨年神戸大学を卒業したにしき恋のOBが今年から西紀南地区に就農しました。大学を卒業してすぐに自分がやりたいことを実現する場として西紀南地区を選び、西紀南に移住し起業しました。このことがにしき恋に所属する学生にとっても、農村への移住や起業が身近なものになっていると感じています。5年間の活動を通じた地域との繋がりが形となって、このような結果になったと思います。にしき恋の活動で学生が地域に入り活動を楽しむ。そして地域に対して愛着を持つ。愛着を持った学生達が地域にアクションを起こす。地域の方達も私達への信頼をもとにやる気を出してアクションを起こす。学生と地域が、より居心地の良い地域にするために共に考え行動する。それがにしき恋と西紀南地区の間では日常的に行われています。その結果、西紀南地区とにしき恋は一種の共同体のような形になってきているのではないかと思います。地域の方々はもちろんですが、学生側も地域のために何かできることはないのかと自分達で主体的に動くようになっていきます。まだまだ発展途上ではありますが、この共同体は確実に大きくなっていくと感じています。

今後についてですが、5年間の活動でにしき恋に所属する学生は、楽しみながら活動していく内に西紀南に愛着を持って何度も地域に足を運ぶようになっていきます。またにしき恋の卒業生達も、卒業して西紀南から離れたとしてもこの共同体の一員として地域について考え、時に西紀南に帰ってきます。さらに、毎年50人以上の様々な分野の新入生がこの共同体の新たな一員として加わっていきます。私達にしき恋は、卒業生が地域に帰ってくる場、そして新たな学生が地域に入っていく入口としての役割を続けていきたいと思っています。さらに私達にしき恋は、これまでの5年間に築き上げてきた地域の皆様との絆をより深めていくとともに、今まで篠山を知らなかった学生達、あるいは若者達を都会から引き込んでいくといった取り組みを学生の立場から考えていきたいと思っています。これからも地域の方々への感謝を忘れずに活動していきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。



団体構成

- 人数 **152名** (12月3日現在)
- 神戸大学以外にも複数の大学在籍者が所属
- 農学部にとどまらず **様々な学部生**により構成

活動内容

①農業ボランティア

…毎週土日、農家さんのお手伝いをする。年間通しての基本活動。



②農作物の生産と販売

…耕作放棄地をお借りして、自分たちも栽培を体験。収穫物の販売や収穫祭の開催も



③地域交流

…お祭りなど地域のイベントに参加する。また、自分たちでイベントを企画することも。



今年度の活動(農業ボランティア)

12月3日現在のべ**1108人**が参加、受け入れ先も3件増える。
繁忙期である10月は**1日に61人**が来たことも!



今年度の活動(農作物の生産・販売)



今年度の活動(農作物の生産・販売)



マルシェでの販売

大学内での販売



今年度の活動(地域交流)

①小・中学生との交流



今年度の活動(地域交流)

②地域行事への参加・企画

お祭り



懇親会



料理交流会



活動のアウトプット



SNS



HP



冊子

活動のアウトプット



地域の方への報告会

東京での発表



これまでの活動を通じて

・にしき恋OBから西紀南地区への**新規就農者**が誕生!





(7) Wake UP! 柏原

こんにちは。関西学院大学の総合政策学部からやって参りました、Wake UP! 柏原と申します。

私達が行った活動は大きく分けて2つあります。丹波市柏原町の情報発信のための冊子を作らせていただいたことと、ライトアップイベントです。

一つ目の情報誌ですが、『Delicious Holiday』という名称です。柏原町の魅力を紹介するための情報誌で、英語バージョンと日本語バージョンがあります。英語バージョンは去年作成しましたが、この背景には柏原の課題として柏原そのものを知っていただかなくてはいけないということがあります。私達自身も柏原に関わるまで柏原のことを知りませんでしたし、それは私達の後輩や先輩達にも同じことがいえます。この情報誌には、柏原の魅力や柏原で行われるイベント、私達の活動なども載せておりますので、内容を紹介させていただきます。

それでは、私から各ページについて詳しくお話しさせていただきます。まず、今スクリーンで見いただいている目次の背景にある建物がJR柏原駅です。とてもおしゃれなデザインでパッと目を引くシンボリックなものなので、これを目次に採用しました。そして、これが私達が考えたオリジナルルートです。実は、この冊子を作る際に地域の方々から「是非大学生目線のものを作ってほしい」、「若い力をどんどん出して行ってほしい」と要望がありました。そこで、私達が実際に柏原に足を運ぶ中で見つけた「素敵だな」と思ったところを柏原の方々にもまた改めて知っていただけたら、との思いでルートを提案させていただきました。

次に、レストランページです。柏原にある店舗を紹介しています。実際に私達が店舗を訪れて思ったことや、内装のこと、普通の情報誌にはあまり書いていないであろうことも私達なりの視線で書かせていただいています。次に、お土産のページです。柏原のお土産と言われるものを実際に買って食べていく中で、素敵だなと思ったポイントを大学生目線で書かせていただきました。

次は、柏原にゆかりのある織田家についての歴史の紹介ページです。柏原で行われている『織田まつり』に私達も昨年は大名行列で参加させていただきました。実際に参加した感想や織田家の歴史について、また柏原の賑わいを身近に感じていただけるページです。また、こちらは柏原で毎月行われている『ハピネスマーケット』というイベントですが、柏原の賑わいがよく分かるものだと思います。若い人にもとても楽しんでいただけるイベントなので、取り上げさせていただきました。こちらの情報誌は12月に一度内案とデザインに関するアンケート調査を行い、その結果をもとに現在さらにブラッシュアップをしているところです。1月に柏原で行われる報告会でお披露目をさせていただき、2月に印刷して配布する予定です。

続きまして、『かいばらいと』というライトアップイベントについて紹介させていただきます。昨年も授業の演習イベントで2016年『かいばらいと』を開催しましたが、その中で問題を発見しました。そして今回10月7、8日に『かいばらいと2017』という形でイベントを行い、その問題を解決へと持っていきました。昨年は規模が大きく広い範囲でイベントを行ったために、イベントの場所が分かりにくかったり、キャンドルの土台に砂を使ったために片付けにすごく時間が掛かってしまった、という点が特に問題だったことに気付きました。今回は規模をある程度絞った上で、さらにパワーアップさせてライトアップを行いました。これが昨年の広報のために使った画像です。前のスライドで11月と書いていますが、正しくは10月です。Wake UP! 柏原には7人が所属していますが、我々の大学の友人などに協力を依頼し、学生スタッフ18人で準備を行いました。キャンドル総数は1,500個で、これは去年よりも500個ほど多くなっています。そして準備時間は16時間、これは7日と8日の合計の準備時間で、実際には企画の立案などかなりの時間を割いて準備を行いました。そしてキャンドルナイトです。キャンドルナイトでは1,500個のキャンドルを使用しましたが、まちづくり柏原様、観光まちづくりの会の方々の協力の下、キャンドルを並べてイベントを行いました。ご覧いただくとお分かりかと思いますが、今回は去年のような処理に困る砂ではなく、水の上にキャンドルを浮かべたフローティングライトを使用しました。これは使ったあとにキャンドルだけ出して水はそのまま流すことができるので、非常に効率的に準備と片付け

ができます。

また、ライトアップも行いました。こちらは大学のゼミの先生の友人である『LEM 空間工房』（大阪にある照明デザイン会社）の長町志穂様にご協力いただき、柏原町の織田陣屋跡、木の根橋、市役所の柏原支所の3箇所をライトアップしました。木の根橋はこのように約30秒ごとに光が4色に変わっていくという演出で、ご来場の方にも非常に高評価をいただきました。そして、他団体ではありますが SHADECOR（シェイデコ）という同じ関西学院大学の団体のプロジェクションマッピングが同じ日に行われており、こちらも含めて我々の『かいばらいと』も盛り上がったのではないかと考えています。私達は今回のイベントの動画を YouTube に上げております。YouTube で『かいばらいと 2017』と検索していただくと、プロジェクションマッピングのフル動画を含む4本の動画をご覧いただけます。

ここからは『かいばらいと』当日に行ったアンケート調査について報告させていただきます。アンケートの全部の内容は、1月27日に柏原町で行われる関西学院大学主催の最終報告会で発表しますので、今回は一部抜粋してお伝えします。アンケートは今回、56名の方にお答えいただきました。幅広い年代の、最年少は3歳の幼児から、最高齢は83歳の女性までがご協力くださいました。「本イベントをお楽しみいただけましたか？」という質問には、93%の方が「はい」と答えてくださいました。特に人気が高かったのが、『たんば黎明館』という建物で行ったプロジェクションマッピングです。プロジェクションマッピングを一通り見終わったあとにキャンドルを見に来られる方も多く、キャンドルを並べた大手通りや長町さんにライトアップしていただいた木の根橋がその次に人気がありました。「夜間イベントとして良かったですか？」という質問には、これも約9割の方が「はい」という回答でした。「今回のイベントがもしまた柏原であれば参加したいですか」という質問にも9割の方が「はい」と回答してくださったので、12月23日に柏原町でまたライトアップイベントを企画しています。詳細は、配布している団体概要の裏側に載せているポスターをご確認ください。ポスターの左下に小さく私達の作った SNS アカウントを載せています。またそこに YouTube の宣伝もしていますので、ご確認ください。

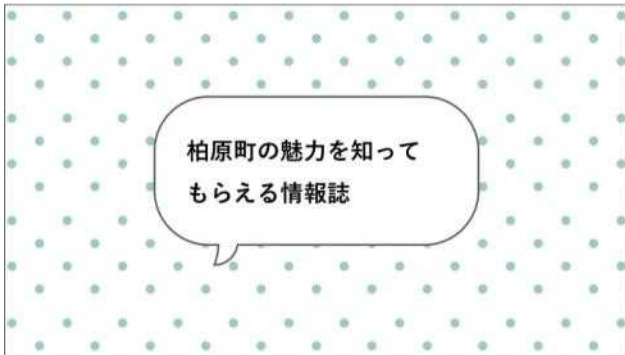
ご清聴ありがとうございました。

〔連携先の株式会社まちづくり柏原の方からのコメント〕

私達の会社は、約18年前に作られました中心市街地活性化法という法律の下に、柏原のある範囲をいろいろな活性化をするという目的で作られました。その中で、関西学院大学の学生が関わってくれ始めて9年目になります。今までに、約140~150名の学生が授業で柏原に来てくれています。大学と提携する当初、柏原での授業で大学の単位が4単位出ることを約束していただきました。そういう点で、指導の先生方には非常にご迷惑をお掛けしていると思います。そしてやはり学生というのは、まず知ったようなことを言いますが、金を持っていないということ、時間があまりないという制約があります。そういう中でもやはり年によっては、非常に地域との関わりが熱心な方達があります。今日の発表で前に出ている方は、去年の現地フィールドワークを受講した学生さんで、今年は県民局の補助事業を利用して活動していただきました。

私達が地域で活動する中で課題となっているのが、例えば夜の賑わいの創出とか、情報発信です。地域で活動している人は非常に高齢ですので、情報を受ける側とのギャップが非常にあります。そういう時に今回も YouTube で情報発信をしてくれました。また、例えばライトアップなど学生では人数的に無理な企画の時に、友達や別の団体に働きかけてくれるということが、非常に嬉しかったです。現在大学3年生のこの方達が4年生になって、柏原に来られなくなっても、やはりこのライトアップは柏原の夜の名物事業としてまちづくり柏原と他の団体が続けていく予定にしています。

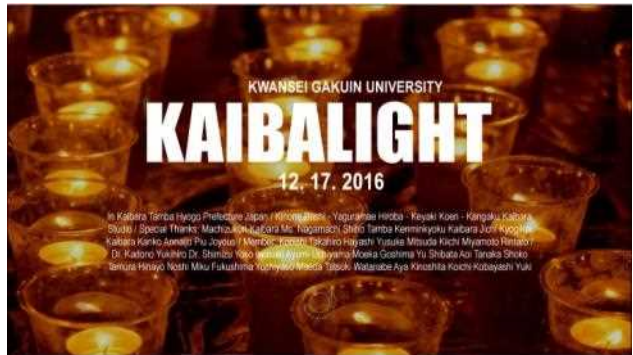
ありがとうございました。



12	アンケート調査
2018	
1	報告会にてお披露目
2	印刷、配布

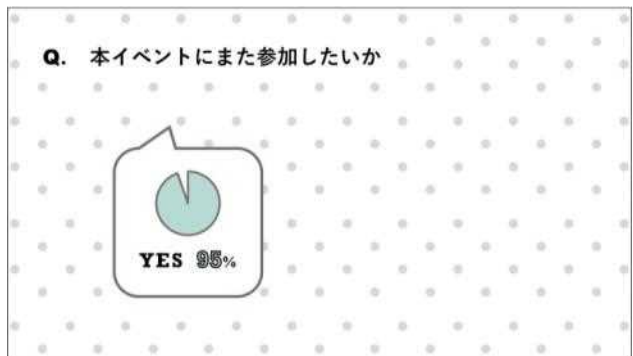
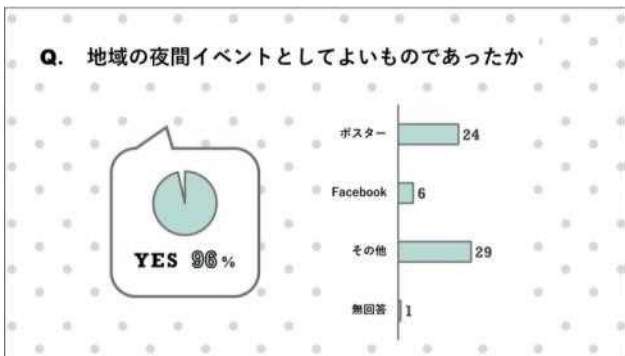
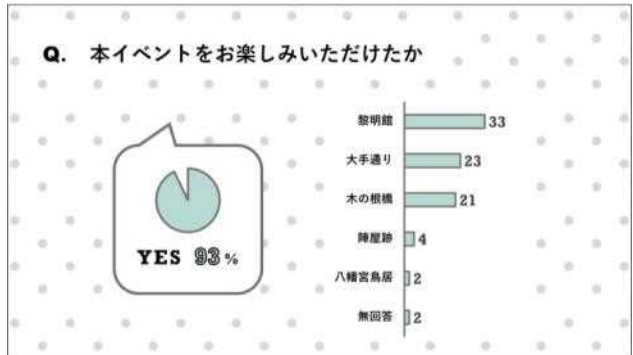
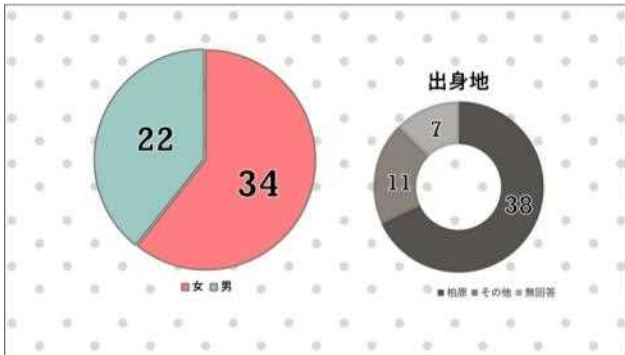
かいばらいと 2017

柏原町の魅力を生かした
ライトアップイベント



学生スタッフ 総数	18人	
キャンドル 総数	1500個	準備時間
		16時間





(8) さじっこ倶楽部

さじっこ倶楽部の発表をさせていただく田中凌平です。よろしくお願いします。

まず、さじっこ倶楽部は2012年に発足した関西大学の学生を中心とした任意団体です。プロジェクトによっては関西大学以外にも摂南大学の学生が加わっています。僕たちはここに書かれているこれらのことを意識しながら丹波の環境を客観的に捉え、地域の特性や資源、素材の新しい利活用の提案をし、地域をフィールドに住民と学生が協働し実践することで、今までの丹波にはなかった風景をつくりだすことを目的として、年間を通じて丹波に関わるような活動をしています。

それでは、今年度僕たちが関わったり、企画・運営をしたプロジェクトの紹介をしていきます。まず、『あおがき灯りのタペ』です。このお祭りでは、中高生が連携して企画する子ども屋台の企画を考える場面に僕たちも加わりアドバイスなどをしました。最初は中高生も慣れない場面も多かったのですが、徐々に打ち解けて企画を練ることができました。それ以外にも右下の写真では灯籠を置く台を設計・施工したり、『こども行灯』の組み立てなどでお祭りに関わりました。お祭りの当日は、設営から参加しました。地元の有志の方々と一緒に作業することで、イベントへの思いを共有でき一体感が生まれたように感じています。お祭りの時は、このような雰囲気です。行灯は全部で500個ほど並んでいて、天候にも恵まれ多くの来場者がありました。点灯はお客さんと一緒に点火をしたり、こども園の子供達が絵を描いた『こども行灯』が並んでおり、手作り感のある温かいイベントになっていたように思います。このお祭りは子供が多いので、子供達が楽しめるような企画を考え、中高生はストラックアウトや輪投げといった誰でも楽しめるような催しを企画しました。学生も、ものづくりの楽しさを知ってもらう為にワークショップの屋台を出して、灯籠づくりを行いました。『あおがき灯りのタペ』からは、中高生を地域に繋げる大切さを感じました。直接地域に関わるのはハードルが高いと思いますが、僕たち学生を通じてイベントに参加することで、地元のことを一緒に学びながら企画を考えることができたと思っています。また、学生と触れ合うことで今まで気付かなかった佐治の魅力に気付き、中高生が少しでも将来地元に戻ってきたいという思いを抱いてくれたら嬉しいと思います。次に僕たちはお祭りだけに参加するのではなく、その企画や準備段階から関わることで、行灯台の制作など祭りが始まる前からまちに賑わいを生み出せるよう努めてきました。そして、お祭りを通して地域に関わり、交流会にも参加するなどして来年に向けての交流の下準備なども行いました。今年は実行委員会にはあまり参加できなかったのですが、そういった場面にも参加し、より綿密な関わりができればと思っています。

次は『空き家キャンプ』です。9月には佐治の空き家を使って、今年からの新事業となる『空き家キャンプ』を行いました。これは関西大学佐治スタジオが企画する事業に参加するという形でしたが、実践的に空き家の活用を考えました。『空き家キャンプ』では、二泊三日で空き家に泊まり込み、土間を使ってレクチャーを行ったり、作業を行いました。実際に提案を行う空き家に滞在しながら提案を考えるという経験は初めてで、なかなか大変でした。しかしながら、実際にここで寝泊りすることによって道行く人に声を掛けられ、佐治の昔話や世間話を聞いたのは良い経験でした。こちらが、僕たちの提案をまとめたものです。昔の佐治には厩戸(うまやど)があったことから自転車を馬に見立てて、自転車乗りのゲストハウスやコテージのあるゲストハウスを提案しました。両方とも土間を生かした提案で、まちに対する影響を考えています。このプロジェクトは佐治スタジオが主導で動いていたので、来年は僕たちも企画や運営に携わっていきたいと思っています。また、空き家で過ごすことで空き家の活用だけではなく、佐治の過去から将来の姿まで想像できる取り組みができたことはおもしろかったです。そして、この『空き家キャンプ』で佐治のまちの活用提案をストックしていき、イベントの時にお披露目したり、移住したいという人に向けて提案ができるようになれば良いと思っています。

次に『佐治農園 re 活用プロジェクト』です。こちらは三年前から始まった、佐治の休耕地を学生が主体となって活用するプロジェクトです。休耕地を使ってイベントを行い、佐治ならではの休耕地の活用を考えています。昨年は農機具小屋の制作やベンチの制作を行い、今年は食の活用をテーマとして大きな移動式キッチン制作を目標に活動しました。こちらが、移動式キッチン制作過程です。僕たちが設計をし、ディティールなどを現場で考えながら作業しました。また、

荷物や食材などの収納場所を考えながら施工をしています。こちらが、完成したキッチンです。キッチンを使って第4日曜日に開催している『ホニイチ』というイベントで、チョリソーとピザの販売を行いました。本当はピザなどにも佐治の食材を使って佐治農園でやる予定だったのですが、台風が直撃した影響で急遽、屋内での実施となりました。悪天候にも関わらず10名ほどの方が来てくださり、お披露目することができました。今後はこのキッチンをバージョンアップしたり、農園の活用を考えていきたいと思っています。この活動は、空き地の活用提案を実践する場として学生達が主体的に運営をしている事業なので、自分たちが考えていることが実現に繋がるのでとても楽しく勉強ができます。また主体的に活動することで、ものづくりの大切さや大変さを身をもって体験できます。今後は佐治の休耕地活用を目指し、自分たちで考えた仕器や手法を地域住民の方々にも使ってもらえるような取り組みを目指していきたいと思っています。

最後は、『佐治で開催されるイベントの企画・運営補助』、『地域交流ワークショップ』、『愛宕祭を通して成松中央地区に関わる』の3つを合わせてお話をさせていただきます。佐治で開催されるイベントの企画・運営補助では、毎月第4日曜日の『キヌイチ』や佐治倶楽部が主催する『大人の夏祭り』、『丹波八宿青垣の秋』などがあります。『丹波八宿青垣の秋』では、学生は氷上西高校の生徒と一緒に『土田うどん』の制作をしたり、飛脚リレーに参加しました。それ以外にもセンバヤという空き家を使って大学の夏季休業中に行った授業の報告展示をするなど、イベントに参加したり手伝うだけでなく、地域と一緒にイベントを盛り上げました。また、関西大学が主催する地域交流ワークショップの運営補助もしています。年8回開催されている地域交流ワークショップでは、青垣の技術者や職人の方を講師として招き、その技術を使った個性豊かなワークショップを展開しています。それ以外にも『愛宕まつり』を通して丹波市氷上町成松の中央地区のイベントや事業に関わっています。例年、8月17～25日までの間、交流館に泊まり込んで愛宕まつりに関わり、造り物の制作をしています。今年は『愛宕まつり』だけでなく、地域の伝統的なお祭りである『川裾まつり』や『秋祭り』にも参加しました。今後も地域と密接に関わりながら新しいプロジェクトを運営していければと思っています。

これらのことから、一年を通して丹波に関わる大切さを改めて感じ、丹波の様々な表情及び魅力を身をもって知ることができました。そして、僕たちが丹波の様々な地域や住民の方と関わることで、今は建築学科の学生が中心で活動していますが、様々な学生が参加できることを目指しています。

活動の広報としては、Facebookを使っています。それ以外にも佐治倶楽部のホームページや佐治スタジオのFacebookページもあるので興味のある方はぜひご覧ください。

これでさじっこ倶楽部の発表をおわります。ご清聴ありがとうございました。

丹波地域大学連携フォーラム

さじっこ倶楽部

田中 凌平
植地 惇

さじっこ倶楽部とは

・2012年に発足した、丹波市(主に青垣町佐治)に関わる関西大学の学生を中心として組織。
※例外もあり

・地域のお祭りなども一緒に取り組み、学生と地域の方がフラットに付き合える活動を目指す。

・地域の魅力を体感的に感じ、地域の方々と協働することによって、新しい魅力・利活用のカタチを考えていく

・学生らしいアイデアを生み出し、提案をストックすることで、地域の方に新しい発見・気づきを与える

今年度の活動

- ① 5~7月 あおがき灯りの夕べ(中高連携)
- ② 9月 空き家キャンプ
- ③ 通年 佐治農園Re活用プロジェクト
- ④ 通年 佐治で開催されるイベントの企画・運営補助
- ⑤ 通年 地域交流ワークショップ
- ⑥ 通年 愛宕祭を通して成松中央地区に関わる



- ・中高連携の大切さ
→若い世代が地元に関わる「関わりしろ」を学生が加わることできっかけを生み出し、イベントに関わる魅力を伝える
- ・地域の方が主体となるイベントに協力し、活気を生み出す
→学生がイベントに参加し企画・運営することで地域の方だけではできなかったことが可能になる(行灯台の作成など)ができ、さらに新しい活気を生み出す
- ・学生と地域が関わる
→イベントを通して学生と地域が知れる。また、終了後には佐治スタジオにて交流会を行い、お互いを知るきっかけとなった。



空き家 CAMP - 超実践型 空き家活用提案合宿 -

■主旨
日本全国で増え続ける空き家。平成 25 年度の国勢調査・土地利用調査では、全国の空き家数は 320 万戸にも及ぶというデータが発表されており、近頃も増え続けています。様々な観点から問題が指摘されている空き家ですが、一方で、風を浴びたり緑を眺めるだけで、癒やしを得たり、まちの活性化も促さることもあります。「空き家の活用提案ワークショップ」では、空き家地域の視察と視察、「滞在型空き家」の可能性を視察的に学び取り込みます。今回は「空き家キャンプ」というテーマのもと、空き家を活用して暮らした経験から新たな活用提案の案を考案しました。

■行程
2017 年(水)～(金)
1 日 視察
2 日 視察
3 日 視察
4 日 視察
5 日 視察
6 日 視察
7 日 視察
8 日 視察
9 日 視察
10 日 視察
11 日 視察
12 日 視察
13 日 視察
14 日 視察
15 日 視察
16 日 視察
17 日 視察
18 日 視察
19 日 視察
20 日 視察
21 日 視察
22 日 視察
23 日 視察
24 日 視察
25 日 視察
26 日 視察
27 日 視察
28 日 視察
29 日 視察
30 日 視察
31 日 視察
32 日 視察
33 日 視察
34 日 視察
35 日 視察
36 日 視察
37 日 視察
38 日 視察
39 日 視察
40 日 視察
41 日 視察
42 日 視察
43 日 視察
44 日 視察
45 日 視察
46 日 視察
47 日 視察
48 日 視察
49 日 視察
50 日 視察
51 日 視察
52 日 視察
53 日 視察
54 日 視察
55 日 視察
56 日 視察
57 日 視察
58 日 視察
59 日 視察
60 日 視察
61 日 視察
62 日 視察
63 日 視察
64 日 視察
65 日 視察
66 日 視察
67 日 視察
68 日 視察
69 日 視察
70 日 視察
71 日 視察
72 日 視察
73 日 視察
74 日 視察
75 日 視察
76 日 視察
77 日 視察
78 日 視察
79 日 視察
80 日 視察
81 日 視察
82 日 視察
83 日 視察
84 日 視察
85 日 視察
86 日 視察
87 日 視察
88 日 視察
89 日 視察
90 日 視察
91 日 視察
92 日 視察
93 日 視察
94 日 視察
95 日 視察
96 日 視察
97 日 視察
98 日 視察
99 日 視察
100 日 視察

■作業風景
空き家の活用提案ワークショップの様子。参加者が空き家の活用提案を考案しています。

■実施場所：よしみや
よしみやの空き家活用提案ワークショップの様子。参加者が空き家の活用提案を考案しています。

提案① Cyclist×ゲストハウス
自転車の乗り心地を良くするための提案。自転車の乗り心地を良くするための提案。自転車の乗り心地を良くするための提案。

提案② 街中コテージのある家
街中コテージのある家の提案。街中コテージのある家の提案。街中コテージのある家の提案。

- ・佐治スタジオで協力して空き家の活用を考える
→今年度からスタートした事業であり、今年には参加のみに終わったが来年度は企画・運営に携わりたい
- ・空き家の活用から佐治のまちの将来像を考える
→まちに入り込み活用提案を考えることで、地域との交流も生まれそのまちの過去を知り、未来について想像できる
- ・活用提案ストックを考える
→空き家の活用提案を考えることで佐治のまちに活用ストックを貯めることができ、移住したいという声が上がった時に提案が可能



- ・空き地活用提案を実践する場
→三年目の事業であり、佐治の休耕地の活用提案を考える取り組みとして学生が主体的に企画・運営を行う
- ・ものづくりの面白さを体感する
→自分たちで設計・施工を行い、ものづくりの大変さや魅力を体験する
- ・地域で「使える」製品を企画する
→自分たちで作った什器や手法を地域の人にも使ってもらう。

- ④ 通年 佐治で開催されるイベントの企画・運営補助
- ⑤ 通年 地域交流ワークショップ
- ⑥ 通年 愛宕祭を通して成松中央地区に関わる





- ・一年を通して丹波に関わる
→一年間を通じて丹波に関わることで、様々な表情を知ることができる
- ・丹波を知る
→とにかく丹波を知り、深く関わるきっかけをつくる
- ・様々な学生が関わる場を提供する
→建築学科の学生ばかりではなく他学部の学生や他大学の学生が関わるきっかけを作っていきたい



ご清聴ありがとうございました

6. グループ討議『地域貢献活動をより魅力的にするためには』

司会：神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ 学術研究員 衛藤 彬史

(1) 進め方

予め各学生団体のメンバーをランダムに編成した6班と行政・地域住民の方で構成された1班の計7班が、それぞれ『地域貢献活動をより魅力的にするためには』をテーマに活動報告を聞いて参考になったこと、面白いと感じたこと等を話し合いました。その後、会場全体で各班で話し合った内容の共有を行いました。

(2) 全体共有の内容

【1班】

私達のグループは、『地域貢献活動をより魅力的にするためには』ということで、各大学の連携が必要なのではないかというところで話がまとまりました。去年も同じような話題が出たのではないかと思います。結局一年経って同じところに行き着いているという感じです。

そもそもまずここで出たのは、「各団体が何をしているのかよく分かっていない」という話です。私達から丹波県民局さんに向けて注文があります。現在、各団体が毎月の活動報告を県民局さんに提出し、県民局さんがまとめて全団体に送ってくれていますが、それが読みづらいので、結局それをきちんと読んでいる人はそんなにいないと思います。それよりももっと大学生側からアクセスしやすいような活動報告のプラットフォームみたいなものをホームページや Facebook などの SNS で確立していった方がより連携しやすいのではないかと思います。イベント等も今日発表していただいて、「そんなのやってたんだ」と皆さん思われたと思います。そういうプラットフォームを作ることで、もっといろいろな団体の方に手伝いに来てもらいやすくするということが必要なのではないか、というのが私達の班の意見です。

【衛藤先生】

ありがとうございます。大学間の連携が必要だという認識は皆さんが持ちつつも、去年からそこで止まっているということですね。県民局さんの方には前回は提案があつて、毎月各団体がこんなことをやっている、という共有はしてもらっているけれど、そのメールがきちんと見られていないとか、消化しきれていないということですね。

【1班】

ZIP ファイルで送られてくるのですが、その ZIP ファイルを開くこと自体やっていない団体が多いのではないかと思います。ですから、WEB 上で見られるように、プラットフォームだけ準備していただいたら、運営は学生団体がやるみたいな方法を確立していったら良いのではないかと思います。

【2班】

我々は、地域貢献活動をより魅力的にするために、まず学生側の問題というか課題として、それぞれの大学での専門的な勉強が各々のグループの活動に直結していないとか、繋がりが薄くてもったいないことになっているケースが多いのではないかと感じました。学びを活動に、地域貢献に直結させていく仕組みを作る。そして、地域貢献活動そのものを充実していくことが一つ大事なことかと思えます。活動を魅力的なものにしたとしてもそれをコンスタントに地域に還元できなければ意味がありません。

にしき恋さんのようにグループの規模を拡大していき、毎月複数回、全員でなくても数名がコンスタントにそこに

通える体制をつくる。これが2つ目に大事なことかと思えます。そのにしき恋さんがコンスタントに活動できている背景には、交通の便が良いというのがありますが、宿泊施設を無料でお借りできるため、学生も負担が少なく定期的に頻繁にそこに行って活動できる状態があります。そういう体制を他の地域でも作っていただければ、地域貢献活動もより魅力的なものになっていき、大きく貢献できるのではないかと思います。

【衛藤先生】

ありがとうございます。まず、学生が専門的に学んでいることと活動が直結しない場合に継続の難しさがあるということですね。地域に宿泊できる場所などがあるとより深く込み入っていけないのではないかと、ということをお考えとということですね。

【3班】

私達の班で出た意見は、神戸山手大学さんの発表時に「鹿肉の鮮度を保てるのは捕って3日以内のため、生肉のままだと流通ができない」と聞いて、燻製や冷凍で一年中食べられるようにしてはどうか、ということです。そこで、その考えを私が所属するミライの輪に当てはめてみると、生のまま野菜などを売るのではなく黒枝豆を加工するなどして加工品にすることによって、一年中流通できるようにすれば自分の団体の活動にも活用できるのではないかと、思いました。

海外の留学生などを受け入れて活動されている団体、海外に向けてアピールされている団体が2団体くらいあったと思いますが、そこは今後どのように継続的に活動されていくのかということと、費用の工面はどのように行っているのかということが疑問点として出ました。

【衛藤先生】

ありがとうございます。2点目の海外へ展開をしているグループに対して、お金の面も含めてどのように継続しているのかという質問があったので、それぞれ聞いてみたいと思います。

【AGLOC】

我々は今年の冬にラオスに行くのですが、これは神戸大学の研究者の方と合同で行かせてもらっています。基本的にはこのようなプロジェクトがあった場合は、それに関連する研究費等を使わせていただけて行く、という形にしています。そういうことがない場合は、メンバーの留学生の実家周辺の農家さん等に行かせていただきますが、それは自費で、ですね。

継続性に関しては、神戸大学には毎年留学生が1,000~2,000人来ますので、彼らに毎回Welcome Camp等を通じてアプローチを掛けていくことで、継続的にメンバーは確保できている状態です。ただ地域の方々の理解を得ていくというのは課題かと思っています。

【Wake UP! 柏原】

英語の情報誌は、取材させていただいた店舗に置いてもらっています。お店の方から「中国人の観光客が店に来た時に手に取って読んでくださっている」という話を聞いて、「作って良かった」と思いました。

【4班】

時間が足りなくて、全員でまとめるというところまでいけませんでした。高校生や小学生の子達と関わって一緒に取り組んでいる団体が複数あったことが印象に残りました。僕の所属するWake UP! 柏原は、普段自分達より年上の方と取り組むことが多いので、つい「自分達がこの中で一番若いんだ」と勝手に思ってしまうがちです。しかし、当たり前ですが、自分達よりもっと若い世代はいるので、若い世代から年配の方まで幅広くいろいろな方の意見を聞けるというのは、すごく良いことだと思えました。また、普段自分達の団体はどういうふうに見られているのか、というのを聞く機会はあまりないので、今回のように他団体の方達とお話できる機会は貴重だと思えました。

【衛藤先生】

ありがとうございます。今の話は、地域の方と言っても年配の方だけではなく、小学生や高校生とも連携している団体があり、そこに興味があるという話だと思います。そういった小中学生、高校生と連携している団体に、実際にやってみて感じるおもしろさ、難しさ、大変さなどを共有していただきたいと思います。

【Bamboo Bus Stop Project】

私達は東雲高校の高校生と一緒に活動しています。高校生と一緒に活動する中で一番初めに気付いた点としては、高校生は結構遠くから通学していて、地域のことをあまり知らない人が多かったということです。多分小学校や中学校は地元にあるので、小中学生はまだ地元のことが分かっていると思います。でも、高校生になると地域外の高校に通ってしまい、「高校には通うけど、高校のある地域のことを知らない」という人が多いです。そういう人達に地域のことをどれだけ知ってもらうか、というところから私達の団体はスタートしました。まち歩きを一緒にしたり、福住というのがどういうところなのかについて地図を見ながら付箋を貼っていくようなワークショップを一緒にするところから始まりました。多分そういうところで、小中学生とはまた違う難しさが高校生にはあったと思います。

【衛藤先生】

ありがとうございます。地元出身ではない高校生が意外と地域を知らないということがあるということですね。もう一つ、小中学生と連携をしているところがあったと思いますが。

【地域密着型サークル にしき恋】

うちのサークルでは、小学生と中学生との交流を増やしています。高校生と違い小中学生は地元の学校に通いますが、中学校を卒業して高校生や社会人になると地元から離れていくのが現状だと思います。離れるのを止めるのもそうですが、離れたあとも「実家のある地域はこれだけ魅力があるから、あんな楽しいところであれば帰ってみたい」と月に1回でも年に2〜3回でも帰って行ける、「あそこは良いところやな」という意識を持ってもらえるように学生が手伝うことで、楽しい場所という理解をしてもらう。そういうところに小中学生との交流は、意味があると思っています。苦勞する点は、特に小学生は暴れるので、それをコントロールするのが大変というところです。

【衛藤先生】

もともと小中学生と関わるきっかけは、どういうところにあったのですか。

【地域密着型サークル にしき恋】

両方とも学校側から大学生と交流したいという申し出があったことがきっかけです。今では小学生との交流は学生主体で行っています。

【衛藤先生】

ありがとうございます。大変なところもあるけれど、別に地域から出ることが悪いわけではない。大学進学で地元を出たあとも関わるきっかけに繋がるような部分を作っていくよう考えている、ということですね。

【5班】

私達の班では『地域貢献活動をより魅力的にするためには』をテーマに話し合っ、2つの意見が出ました。1つは、地域貢献活動を行うにあたって、ある程度ものごとの見方を豊かにしようとすれば良いのではという意見です。そういう点で AGLOC さんの話を聞いて、22カ国の留学生とボランティア活動をすることによっていろいろな人のものごとの視点を学べて、そのようなことから生まれる creativity、創造力のあるプロジェクトが生み出され、魅力的な地域貢献活動が生まれるのかなという意見が出ました。

2つ目は、PR方法として Facebook や LINE で味気のない記事を書くのではなく、若者を集めるのであれば若者に興味を持ってもらえるようなPRの仕方を勉強していく。それも地域貢献活動を魅力的にしていくために必要なのでは、という意見が出ました。

【衛藤先生】

2つ目のところ、特に若者なら若者に魅力的な情報発信というのは、具体的にこういうところが参考になったというのはありませんか。

【5班】

僕も大学生なのでいろいろな広告を見ていますが、Wake UP! 柏原さんの『かいばらいと』のポスターは印象に残りました。具体的にどういうものかは分かりませんが、若者が興味を持つような『かいばらいと』のポスターは魅力的だと思いました。

【衛藤先生】

ありがとうございます。1つ目の **creativity** です。いろいろな言語、いろいろな文化の人と関わることで、新たな気づきであったり、活動していく中で総括みたいなことがあったのかどうかを AGLOC さんお願いします。

【AGLOC】

おっしゃるとおりで、我々は22カ国からなるメンバーですので、地域の方にご迷惑を掛けることもあったりします。例えば、ベジタリアンの方がいて、「この食べ物がちょっと」という場合です。その中でもやはり22カ国81人の視点というのは様々で、例えば僕達があまり何も感じない応接間に対して、ある意味外国人観光客の視点を疑似体験できるということで、とても参考になるのですが、彼らは本当にすごく喜んでくれます。パシャパシャと写真を撮って、「嬉しかった、嬉しかった、ありがとう」と言ってくれます。

視点も様々で、発表時の動画にもありましたが、「何がおもしろいねん」というようなところにも、彼らは動画を撮るなどして自分でタイ語の紹介文を付けて、動画を発信したりしています。意外とそれがタイの人にウケが良かったりします。僕達は、そんなことは全然分からないんです。何を相手が求めているのかということが、日本人なので分からないのですが、そういう潜在的な、いまどきの言葉で言うと **diverse** と言うんですかね。そういうことがこれからも増えていけばいいのかなと思いつながり活動しています。

【衛藤先生】

ありがとうございます。2つ目の質問に関連して、『かいばらいと』のポスターのデザインを参考にしたいということでしたが、実際にデザインをされた方はこういうところを工夫したとか、参考にしたとかがあればお話しいただければと思います。

【Wake UP! 柏原】

コメントありがとうございました。私とそのポスターを作りました。自分がこのポスターを作るときに意識したことです。私はこういうものを作ることがすごく好きで、**Illustrator** というパソコンのソフトを使ってポスターを作っています。まず、自分が好きなイベントのポスターやライブのポスター、地域マルシェのポスターなどから「自分が一番惹かれるデザインのものって何だろう」というのを考えて、共通点を洗い出しています。そして、フォントの大きさ、バランス、文字の並べ方、写真の入れ方などを落とし込んでいって、できあがったのがこのポスターです。何度も作り直しましたし、外に出して間違いが見つかって回収しに行くこともありました。もちろん、他の方達からも意見をもらったりもしました。

視覚で訴えることは結構な割合を占めるというか、言葉で伝わらないことも伝わると思います。ですから、こういうアプローチの仕方ですとか、冊子の監修もさせていただいたのですが、そういうところでも「何をみて人は見たいと思うのか」というところを意識しながら、作ったりしています。動くものが良いのであれば、動画を作るのが得意な人がいるので、そういう人に頼んだりしています。今日のパワーポイントは代表が作ったのですが、それを見ながら参考にしたり、「何が心に惹かれるか」ということを一番大事にして作りました。

【6班】

私達はテーマに沿ってゴールを決めることができず、自分達が何に興味を持ってこの発表を聞いたか、ということで盛り上がり過ぎて討議時間が終わってしまいました。ですから、私が班の皆と話して感じたことを中心に発表させていただきます。やはり大学生らしい活動を継続して行うこと、これが一番大事だと皆感じているのではないかと私は思っています。おくものがたりさんが企画している運動会が楽しそうであったり、4班の発表と被りますが、中高生と連携して活動している団体が多い、ということを感じました。それを例えば **Bamboo Bus Stop Project** さんでしたら、高校生が「俺が自分で作ったんだよ」という気持ちになって、それを多分友達に言ってくれたのだと思いますが、そういうことが地域に活動がきちんと落ちて根付いていくきっかけにもなると思いました。

そういうことが大事だということで、アイデアや企画を大学とどこか、大学と大学、大学と行政、そういうところで企画を形とか、共有していくことは大事だと思いました。私も6班のメンバーと話していて、大学がどこかとコラボレーションして必ず何か良いものが生まれる、ということに非常に可能性を感じています。その場づくりとして今回のこういうフォーラムとか、運動会とかいろいろなイベントの計画があったと思うのですが、そういう活動自体をこれからも続けていくことが、団体の継続並びにこういう可能性の創出としては大事なのかなと思いました。

【衛藤先生】

ありがとうございます。いくつかあったと思いますが、こういった連携フォーラムもそうですが、実際にそういう大学間の連携をやるということでも今日提案をしてくれたと思うので、改めて広報を兼ねて大運動会の呼び掛けを企画・主催の方をお願いしたいです。

【おくものがたり】

発表を終えたあとの休憩時間にいくつかの大学の方々が声を掛けてくださって、「私達もやりたい」などと言ってくださったので、僕もすごく楽しみにしています。現在のところ、開催時期は2月から3月上旬を予定しています。対象は丹波篠山地域で活動する学生団体としていますが、各自の活動に興味のある学生などを連れて来てくださっても良いかと思えます。例えば農業ボランティアに集まってくれた人や、お祭りの助っ人に来てくれた人、自分の大学の友達等にも声を掛けて、皆と一緒に交流ができればいいなと思えます。また、運動会以外にも「私達、小学校を使ってこういうことがやりたい」という要望があれば、僕に言ってもらえれば仲介しますので、よろしく願いいたします。

【衛藤先生】

時期としては2月か3月ということですね。また、「こういう企画がしたい」という要望も受け付けますよ、ということですね。中高生との交流については重複していたので、割愛します。

【行政・地域住民班】

地元代表として、あまり参加者が残っていませんが、篠山市福住地区を中心に篠山市今田地区の方と2チームになっていますが、お話しさせていただきます。私は、今日来て「本当に良かった」と思っています。本当は、各大学の方の人数は問題ではないんです。少なくとも多くても熱意を持って、あるいは目標を持って来ていただいているということが、私は大変嬉しいなと思って、今日は感動しながら帰らせていただくところです。

我々地元というのも、私も長いこと都市住民と早くから付き合っていますが、その地域のファンを拡大させているという思いがあります。地元は **welcome** な姿勢で皆さんを受け入れる雰囲気とか人間性が必要です。しかし、田舎は田舎同士で人間関係が難しく、そこへ受け入れるとなると余計にまた難しい、という地域の課題はあります。でも、そんなことを言っているのは今の時代は遅れていきますので、最近はかなり住民の意識も変わっているように思います。そういう意味で、学生さんが来てくれかけていた地域も変わってきましたし、Iターンや学生さんが就職して地域にもう一度帰ってきてくれる可能性もあります。

そういう中で私も狙っているのは、Iターンの力を借りてUターンをさせていくことです。親は諦めているんですね。学生になって就職する場合に、ほとんどの人が都市部に行きます。しかし、「やはり帰って来てほしい」というのが本当の願いではあるんです。Iターンの方や学生さんの力がパワーとなって、企業も起ころうとしていますし、徐々にではありますが効果が出てきているように思います。これからもまだまだ期待していますので、よろしくお願いいたします。

【衛藤先生】

ありがとうございます。最後に非常に心強いお言葉を地域の方からいただいたということで、グループ討議はここで終了させていただきます。

7. 地域と連携して開発を進めているお菓子の紹介

神戸大学 赤じゃがプロジェクト 馬場 加奈子

(1) 趣旨説明

皆さん、こんにちは。神戸大学学生の馬場と申します。本日、私の団体『赤じゃがプロジェクト』が困っていることと
いうか、皆様に意見を伺いたいことをこの場に持って来させていただきました。まず『丹波の赤じゃが』という名前をご
存じない方は挙手をお願いします。結構いらっしゃいますね。今日は『赤じゃが』のふかし芋を持ってきましたので、皆
様に試食していただきたいと思います。

まず、『赤じゃが』ですが、篠山市に真南条という地域があります。その真南条と神戸大学が共同で研究して、地域の
新しい特産品にしようとして現在売り出している、皮の赤いジャガイモです。めっちゃ美味しいので、今日しっかり食べてく
ださい。そんな『赤じゃが』を今地域ではジャガイモとして売るだけではなくて、加工品としていろいろなところに出品
して、『赤じゃが』と真南条の知名度を高めようという企画をしています。

『赤じゃが』の加工品はたくさんあるのですが、私はこの一年間、そのパッケージをどうしたら魅力的にできるかとい
うことを考えてきました。本日は、A案、B案、C案という3つの案を持って来ました。真南条にも『赤じゃが』にも魅
力的なところがたくさんあって、なかなかどこをPRしたらいいのかというのが絞れなかったので、皆様に「どうい
うパッケージなら目を引くか」とか、「これ買ってみたいな」と思うものを選んでいただきたいと思っております。パッケー
ジ自体はまだまだ荒削りですので、コンセプトとしてどのような案が良いかを考えていただければと思います。

それぞれの案について説明します。A案ですが、真南条は減農薬、無農薬栽培など自然に優しい農業をしています。そ
んな自然たっぷり真南条の青い空の下で育った「美味しい『赤じゃが』、どうですか？」というパッケージです。B案は、
神戸大学は関西圏では結構ネームバリューがあると思うので、「神戸大学と真南条がコラボした」ということを全面的に
打ち出したパッケージです。C案が、「そもそも『赤じゃが』だけですごく魅力的なんだ」ということで『赤じゃが』の
かわいい赤い皮や黄色い中身を押し出しました。この3つの案があります。

休憩中でもこのフォーラムが終わってからも結構ですので、お手元又は廊下に出してあります黄色い付箋にどれが良
いか、選んだ理由を書いてこちらの模造紙にぺたぺた貼っていただければと思います。『赤じゃが』自体へのご意見、ご
要望又はこんな料理が合っているのではないかとということがありましたら、ホワイトボードの裏面に『赤じゃが』への感
想を付箋に書いて貼ってください。

赤じゃがプロジェクトについて

＝赤じゃがプロダクトをプロデュースするプロジェクト

1. 「赤じゃが」とは?

神戸大学農学部の前身である兵庫県立農科大学の川上幸治先生が完成・選抜した品種（ネオデリシャス）のジャガイモです。真南条営農組合と神戸大学の食資源経営研究センターが共同研究し「イモが太くなる中に空気ができる」という特徴を発見。その後、真南条営農組合では新たな特産品を目指して栽培が始まりました。その名の通り皮が赤く、ホクホクした食感と甘みの強さが特徴で、「丹波の赤じゃが」と命名されています。

2. 赤プロとは?

「丹波の赤じゃが」を使った製品（プロダクト）の開発を応援（プロデュース）するプロジェクトです。真南条営農組合では「丹波の赤じゃが」の知名度を上げるため、アイスクリームやポテトチップス、お弁当等の加工品を開発しています。「赤プロ」は、既存の製品のデザインや販売戦略の検討、また新たな製品の開発に取り組みやすくするために、

【ねらい】

- ・丹波の赤じゃがの特徴を明確にするため、3種類のじゃがいもを食べ比べ
- ・ササヤエキスでムシゴトに注意し、赤じゃが製品への消費者への安心を確保
- ・製品を通して伝えたいこと、どんな商品として販売したいかを検討し、パッケージの統一を目指すことに目標を

目標達成
赤じゃがプロダクトの新しいパッケージデザインを決定し、実際に販売すること！



パッケージアンケートのお願い

赤じゃがプロジェクト

現在、赤じゃがプロジェクトでは「丹波の赤じゃが」製品のパッケージデザインを統一すべく、改善に取り組み中です。本日は、そのデザイン案について皆さまのご意見をいただきたいと考えています。配付した3つのデザイン案は、「真南条の『丹波の赤じゃが』製品を通して伝えたいこと」に集点をあてており、パッケージの「コンセプト」を強調していることを、ご理解ください。

【アンケート回答方法】

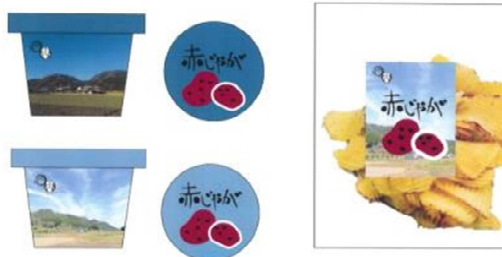
- ・A, B, Cの3案から、「手に取りたい、買ってみたい」と思うデザインを1つ選んでください。
- ・黄色いフせん紙にそのデザインを選んだ理由（なぜ「手に取りたい・買ってみたい」と思ったのか）を書き、選んだデザインのアルファベットが書かれた横道紙にフせん紙を貼ってください。理由が1枚に書き切れない場合は2枚以上でも構いませんが、貼っていることが分かるよう、意図を添えてください。

試食の「赤じゃがのみかし草」と「赤じゃがせんべい」についても、率直な感想をお待ちしています！



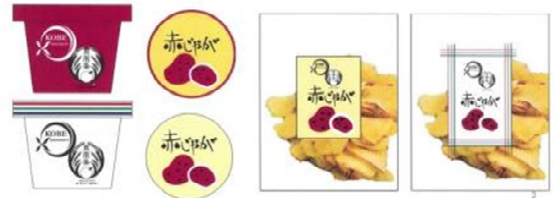
A案: 自然に優しい農業をしている真南条でできた赤じゃが

武庫川の源流がある真南条では、減農薬栽培などの自然に優しい農業に取り組んでいます。希少な動植物が生息し、風光明媚な景観が保たれている地域で育った赤じゃがを使っていることを押し出した案です。



B案: あの神戸大学と真南条がコラボしてつくった赤じゃが

真南条営農組合と、神戸大学が共同で研究していたじゃがいも「ネオデリシャス」2009年に「丹波の赤じゃが」と命名され、真南条の新たな特産品として売り出されています。赤じゃがのロゴや真南条のマークも当時の学生がデザインしたものです。そんな真南条と神戸大学のつながりを押し出したパッケージ案です。



C案: 普通のじゃがいもと一味違う、とにかく美味しい赤じゃが

メークインよりもおいしいとされる「丹波の赤じゃが」赤い表皮にはアントシアニンが含まれ抗酸化作用があります。栗のような甘さとホクホク感があり、コロッケやポテトサラダに向いています。他のじゃがいもとは見た目も味も違う「丹波の赤じゃが」を押し出した案です。

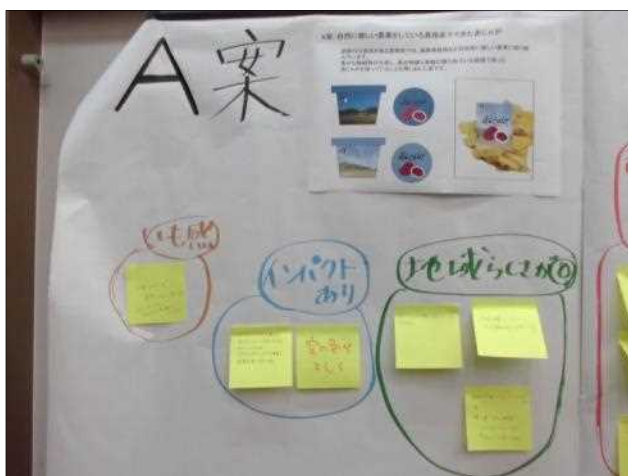


(2) アンケート結果発表

結果としては、B案、C案がとても人気でしたが、「3つとも大事だ」という意見もありました。いただいた意見で一番多いところに振り切ってデザインを考えるわけではなく、それぞれきちんとバランスを考えながら導入していくことが大事ななと思いました。

要素としては、「神戸大学と真南条の連携を推した方が良いのではないか」、「芋感、『赤じゃが』らしさが良いのではないか」、「地域らしさが良いのではないか」という意見がありました。デザイン的なところでは「赤を基調としたシンプルなデザインがいいよね」、「インパクトがあるもの」、「空のイメージが芋感があるね」と言ってくださった方もいました。

「おせんべいの中にアイスを挟んだら良いのではないか」など、おもしろいアイデアもいただいたので、このフォーラムが終わってもそういうアイデアがあれば是非教えていただきたいと思います。



8. 講評

神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ

プログラスマネージャー 橋田 薫

長い時間ありがとうございました。先ほど『場』が大事だというお話がありました。この場はまさにイノベーションラボみたいだなと私は思っています。いろいろと活動して思いを持っている人たちが、互いに化学反応し合っている一つの場なのではないかと思うので、是非これからもこういう場を設けていただきたいですし、社会人の方とももっと接点を持って欲しいなと思います。ありがとうございました。



神戸山手大学 准教授 高根沢 均

今日は皆さん、長い間お疲れ様でした。僕はこの会に参加させていただいて3年目になります。ということはゼミで参加させていただいて3年目ということになりますが、学生さんの話を聞いて、毎年パワーアップしていくとか、すごいなと思います。今日もいろいろな発表があって、コメントの中にいろいろと出ていましたが小中高生、若い人たちと組んで何かをやるといのがどんどん広がって行って、これはすごいなと思っています。



最初に参加した時からずっと思っていることは、この参加している団体間の横の連携をどう作っていくかです。最初のコメントにもありましたが、そこを本当に本腰を入れてやっていけたら、もっともおもしろいことができるかなと思いました。大運動会の提案もありましたが、年度の最後にやってもいいし、春先に何かやってもいいと思います。そこで刺激を受けて、その刺激をどうアクションに移していくかです。考えるだけで止まってしまうとそれで消えてしまいます。しかし、それを行動に移していくことで何らかの結果や自分の成長にも繋がっていくし、地域の方への貢献にも繋がっていくと思います。そういうことを皆で考えていけたら、もっともっとすごくなっていくと思います。そして、私も福住で活動させていただく中で地域の方に非常にお世話になっております。ですから、ご迷惑かとは思いますが引き続き活動させていただきながら、学生のパワーをどんどん生かして地域と一緒に元気になっていけたら良いなと思います。皆さん、どうもお疲れ様でした。

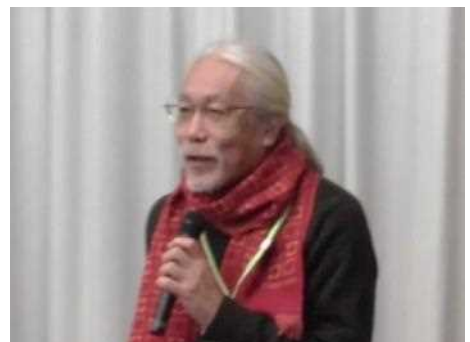
関西学院大学 教授 山下 淳

法学部の授業の一環として丹波市柏原でまちづくりのフィールドワークをさせていただいています。今日報告はしませんでした。法学部の学生にも丹波地域でこういうことをやっている学生団体があるんだということを知ってもらいたかったため引率して来ました。

よく考えると私はこの大学連携フォーラムには、第1回からずっと毎年参加しています。毎年それぞれ個性のある発表で、刺激を受けるところです。

特に今年印象深かったのは、去年も活動したけど今年も続けてとか、もう何年も活動しているというグループが多かったことです。しかし、継続しつつ去年と同じではない、少しあるいは大きく活動内容を変えていて、そういう意味では皆さん方の活動が進化しているということを実感することができました。これは、私にとっても本当に嬉しい発見でした。

もう一つだけ、今日の各団体の発表がまさにそうだったのですが、いろいろな形の活動があります。おそらく学生の皆さん一人一人にとって「こういうことをやりたいんだ」というのが、皆同じではないと、皆違うんだと思います。しかし、



「グループとしてこういうことをやらなければいけない」、あるいは「地域との関わりの中でこういう活動をせざるを得ない」みたいなところもあるのかもしれませんが、ここに来られている皆さんは、こういう地域貢献活動に関心なり興味を持っているから集まっていると思います。しかし、そういう関心を持たない、あるいはそういうことに関心を持ってもらえるかもしれないけれども触れる機会がない学生に広げていく、という意味で「より魅力的にするには」ということも今日にしき恋のお話を聞いていて少しヒントが得られたかなと思います。

おくものがたりの「大運動会をやろう」に対して「なんでや」と質問されて「やりたいから」というものすごくストレートな答えが返ってきました。これには半分呆れましたが、半分「そのとおりだ」と思ったところです。

私にとっても今日は本当に有意義でしたし、おそらく参加した学生の皆さんにとっても、たくさん持って帰るものがあったのではないかと考えています。できれば来年、再来年もこのフォーラムでお会いできれば嬉しいなと思いますし、こちら（参加者）側に座るか、2～3年後のフォーラムでは向こう（実行委員会）側に座るかということも含めて、来年以降楽しみにしたいと思います。ありがとうございます。

関西学院大学 准教授 清水 陽子

関西学院の学生たちが発表していました。私は引率でも何でもありませんし、学生達が自主的に頑張ってくれた活動です。そういった報告、各団体の皆さんもそうだったと思いますが、一年間の振り返りをさせていただいて、先ほどの山下先生の講評にもありましたが、皆さんの活動がどんどん進化していると私も感じました。私は一昨年、昨年と継続してフォーラムに参加していますが、その時は参加をしているだけであったり、地域に対しての皆さんの関わりというのが、ちょっと見えにくいなと感じたところがありました。しかし、今年は今日の報告を聞かせていただいている中では、本当に皆さんが皆さんのアイデアを基に実行しているところが非常に素晴らしいなと思いました。

自分たちの考えをどうやって進めていって実行していくのかと考えることは、すごくエネルギーが必要ですし、そこに向かっていくためのいろいろな課題があったのだと思います。でも、それを自分たちで乗り越えて行かれたということに対してすごく期待をして、今後も来年度も楽しみだなと感じました。ただ来年度はもしかしたら、次の世代に引き継ぐということがあるのかもしれませんが、そこでは、何度も話題に出ています、継続をどうしていくのかというところを是非考えていただきたいと思いました。

私はおくものがたりの方が大運動会の企画理由として言った「僕がやりたいから」に対して、呆れるというよりは「そこだ」と思いました。でも、まず根底にあるところはそこだと思うんですね。皆さん自分たちの活動が「どう社会に還元できるか」とか、「いいことがしたい」という思いはもちろんあるかと思いますが、しかし、一番のベースは皆さん自身が楽しまないとそれに対して地域の方も共感をしていただけられないですし、周りの方の巻き込みもなかなか広がらないと思います。義務とか責任だけではやはり続かないことがあると思うので、皆さんが何より楽しんで欲しいと本当に強く思いました。今日来ていらっしゃる皆さんがそうだと思いますが、これからは是非楽しんで多くの方を巻き込むような活動にしていきたいと思いました。

実行委員をさせていただいていますが、今日のフォーラムに関しては県の方々、地域の方々、本当に多くの方に支えられて開催できたと思っています。活動報告の前に衛藤先生から「他の地域では横の繋がりを作る場がなかなかない」という報告があったと思います。是非、「丹波はこういうことをやっているんだ」ということを広めていただいて、丹波のすごさということをこれからも広めていけるように、私も頑張っていきたいと思っておりますし、まだまだ皆さんにご協力をいただかなければいけない場面もあるとは思っていますので、今後ともどうぞよろしくお願いたします。今日はお疲れ様でした。



関西大学佐治スタジオ 室長 植地 惇

皆さん、発表お疲れ様でした。僕も衛藤さんと同じ年だと思いますが、2012年と2013年に学生団体としてこの事業を活用させてもらい、2012年からこのフォーラムには参加させていただいています。卒業してからは、丹波市青垣町の関西大学佐治スタジオに就職し、そこに住みながらまちづくり活動を実践しています。他の先生方もおっしゃるとおり、だんだんと皆さんの発表の質が上がっていると感じます。2012年に僕が活動の発表をした時は、4団体か5団体くらいだったのが、数も増えていきますし、当時の意見交換会でもこのように大学同士で交流会をしようという意見もちらほらとあったかなというくらいでした。今回のように「各大学が連携した方が楽しそう」ということで、こんなに皆の意見が一致したことはありませんでした。2012年から2017年になるにあたって活動が成熟してきているのはもちろんですが、そういうふうに皆さんが地域との協働などの面である程度のラインを超えてきているから、また新しいことをしたいという意欲が出てきているのかなと感じていて、嬉しいことだなと思っています。

実行委員側として、おくものがたりの運動会も「いいな」と思いながら聞いていました。本当は佐治スタジオの活動と繋げて地域と何か連携し、学生も交えながらできたらとは思っていました。でも、そういう簡単なきっかけでも何か動かしてきて、そういう小さなきっかけから地域や大学が繋がれたら、次の一步に繋がるのではないかと考えています。もし運動会をするのであれば、運営側として佐治スタジオの僕たちも何か協力してできたらと思っているので、是非動かしていってもらえたらと思います。



神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ

学術研究員 衛藤 彬史

今日は長い間、発表とグループ討論とお付き合いいただき、ありがとうございました。最初に話しましたとおり、僕自身も学生として活動していたので、この事業には本当にお世話になりました。例年「関わっている受け入れ先の地域の方になるべくフォーラムに来ていただくようにしよう」とは言っていて、グループ討論には参加せず途中で帰られる方も多かったのですが、活動の報告を聞いていただけたことが非常に有り難かったと思っております。先ほどの話で、楽しむことがもちろんすごく大事で、僕自身もどちらかというと結構「自分が楽しめないことはやらない」という感じで活動していました。一方でこのように事業としてお金をいただいて活動したり、地域の方と一緒に活動するということでの責任感が出てくるということも重々承知だとは思っています。改めてそういった部分での一定の責任であったり、貢献であったりということ意識して、楽しむことも忘れずに今後さらに連携なども広げていき、より良い活動に、そしてフォーラムに来年以降以降なっていけばいいなと思っています。ありがとうございました。



関西大学佐治スタジオ 研究員 出町 慎

皆さん、長時間お疲れ様でした。こうして最初に挨拶することも初めてですし、最後にトリを務めることも初めてなのですが、あまり話すことがないということがよく分かりました。僕は最初の年からこのフォーラムに参加しているという話を最初の挨拶でしましたが、皆さんの発表を聞きながら、今まで皆が知らない先輩達がずっと続けてきた活動が脈づいて繋がってきていると感じます。間接的なこともあるとは思いますが、そういう空気感のようなものがこの7、8年くらいの中でできてきているんだな、と感じました。ですから、そういう意味では皆



さんもまたこれからいろいろな活動をすると思いますが、どっしりと構えて丹波でいろいろな活動をしてもらえたらいいなと思います。『共働』と『継続』という話を最初の挨拶でしましたが、フォーラムの役割自体がまさに皆さんの共働をどんどん進めていくということと、活動の持続性ですよね。持続性って本当に大変なことだと思います。「本当に持続していかなければいけないのか」という議論は当然ありますが、個々の団体で持続的な活動をしていきたいと言ったときに、やはりこういうフォーラムはそこをサポートしていく、担っていく立場にあるのかなと今日強く思いました。フォーラムが立ち上がった当初は、フォーラム実行委員会の役割とは何なのかが本当にあやふやでした。僕自身も関わりながら、「フォーラムはただ単にこういうことをするだけなのかな」とずっと思っていました。でも、今日皆さんの発表を聞いたりしながら、フォーラムの役割というのは皆さんが共働していく場を作ることと、持続性をしっかりサポートしていくことだなと思いました。

それから、**Bamboo Bus Stop Project**の方からも広報の形について提案がありました。今年も衛藤先生を中心にフォーラムの企画を考えてもらいましたが、実行委員会の中では本当に去年のフォーラムのアンケート結果や皆さんから出た意見を受けて、検討をしています。ですから、来年度の企画もまた進めていくのですが、皆さんから出ているアイデアや意見、「もっとこういうふうに変更してほしいな」みたいなことを僕らも真剣に受け止めて、また来年度1年間の事業に反映させていきたいと思っています。その中で、僕たちも実行委員の立場として進めていきますが、もっと学生の皆さんと関わりながら「実際に情報共有するプラットフォームの運営は学生団体の皆でお願いしたいな」とか、いろいろな共働の形を具体的に作っていったら、よりこのフォーラムのあり方として意味があるかと思います。ですから、是非皆さん来年度はこちらの運営側にも入って、一緒にもっと魅力的な場にしていけたらと思っています。

今日のところは本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。